

目次

はじめに

オリンピック・パラリンピック教育のレガシーをめざして	石隈 利紀 ... 1
2020 年に向けて	真田 久 ... 1

活動報告

第7回オリンピック教育フォーラム	村上 祐介 ... 2
第2回オリンピック・パラリンピック教育授業づくりワークショップ報告	宮崎 明世 ... 3
第10回国際ピエール・ド・クーベルタン ユースフォーラム	中塚 義実 ... 4
オリンピック・パラリンピック教育研修会	今井 二郎 ... 9
ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会における教育プログラム	大林 太朗 ... 10
リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会における教育プログラム	荒牧 亜衣 ... 12

実践報告

オリンピックに関わる教育活動	山田 誠、清水 由 ... 14
附属中学校の取り組み	國川 聖子 ... 15
附属高等学校におけるオリンピック教育の実践	奥村 準子 ... 17
附属駒場中・高等学校	登坂 大樹 ... 21
附属坂戸高等学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践	藤原 亮治 ... 24
オリンピック・パラリンピック教育	寺西 真人 ... 26
附属聴覚特別支援学校の取り組み	渡邊 明志 ... 28
ようこそ！先輩 オリンピアンとの交流	大宮 弘恵 ... 29
附属桐が丘特別支援学校のオリンピック教育の取り組み	宮内 綾香 ... 33
附属久里浜特別支援学校のオリンピック教育の取組	河場 哲史 ... 35
大学におけるオリンピック教育 筑波大学における全学対象の総合科目としての教育実践について	嵯峨 寿 ... 36

特別寄稿

視覚障害者のスポーツの現状と課題 視覚障害パラリンピックスポーツ	宮本 俊和 ... 37
オリンピック・パラリンピックを通じて学ぶおもてなしの心	江上 いずみ ... 41

はじめに

オリンピック・パラリンピック教育のレガシーをめざして

筑波大学副学長・理事、附属学校教育局教育長 石隈 利紀

次世代を生きる子どもや青年にとって、多様な人々と共生する態度と能力が求められます。筑波大学および附属学校群においては、そのグローバル教育の柱が「オリンピック教育」です。平成25年9月、2020年オリンピック夏季大会の東京開催が決定し、文部科学省は、オリンピック・パラリンピック教育の充実や全国展開に必要な方策等を検討することを目的として、オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議を開催し、平成27年7月9日「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて（中間まとめ）」を公表しました。中間まとめでは、「なお、オリンピック・パラリンピックは一過性の単なるスポーツイベントではなく、オリンピック・パラリンピック教育も2020年東京大会だけを目的や終着点とするものではないことに留意して、有形・無形のレガシーの創出という観点も踏まえつつ、本中間まとめの提言をはじめ、オリンピック・パラリンピック教育の推進を図ることが重要であることを附言しておく。」と記述しています。

筑波大学附属学校教育局は、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会決定の2年前、平成23年3月に「附属学校オリンピック教育推進専門委員会」を発足し、各附属学校における国際平和教育としてのオリンピック教育を推進してきました。

筑波大学附属学校群は、教育活動全般でのオリンピックの5つの教育的価値「努力の喜び (Joy of effort)」、「フェアプレイ (Fair play)」、「他者への尊敬 (Respect for others)」、「卓越性の追求 (Pursuit of excellence)」、「バランスのとれた身徳知 (Balance between body, will and mind)」が示す人間像の育成をめざすことを目的に、各教科・科目、行事・部活動等の教科外活動など様々な場面での活動を行っています。また体育授業・行事だけでなく、社会科、朝のランニング、「おもてなし」授業などを通して、児童生徒の成長が見られます。そして今年度もオリンピック教育の授業や活動案をまとめております。さらにスポーツ庁委託「平成27年度オリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業」に筑波大学 CORE のもと附属学校群が協力し、附属学校群のオリンピック・パラリンピック教育の実践例を、推進3府県に紹介しました。

2020年東京オリンピック・パラリンピックとその後のレガシーをめざし、筑波大学および附属学校群では、「オリンピック教育」の実践と研究を進めて、全国の学校と未来の平和社会に貢献したいと、思っています。

2020年に向けて

筑波大学体育系体育専門学群長、CORE 事務局長 真田 久

2015年度は、オリンピック教育プラットフォームにとり、忙しくも実り多い一年であった。通常のオリンピック教育フォーラムなどのオリンピック教育の推進に加えて、スポーツ庁の委託事業に関わり、宮城県、京都府、福岡県におけるオリンピック・パラリンピック教育の推進に関わったからである。実施時期が遅れたにもかかわらず、各県の教育委員会と各学校が対応していただき、それぞれで成果を上げることができた。この取り組みは次年度にも引き継がれることになっているので、これまで培ってきたオリンピック教育やパラリンピック教育の積み重ねが、それらの全国展開に向けてあゆみ出したということになろう。その意味では喜ばしいことではあるが、各県における取り組みには、優れて目を見張るべきものも多く見られた。私たちはそのような優れたものを積極的に学んで逆輸入していく発想も大事だろう。

またIOCとの連携も考えられる。IOCによる新たな教育プログラムが発表される予定であり、その内容とも関連付けたオリンピック教育やパラリンピック教育の内容の吟味が求められる。2020年に向けて、私たちの取り組みが、日本のオリンピック・パラリンピック教育の展開に一定の影響を及ぼしつつある事は明らかであり、今後も着実な歩みを続けたいと思う。

また今年度で石隈先生が筑波大学を退職されました。これまで様々なオリンピック教育プラットフォームを支えていただきましたことに感謝申し上げるとともに、今後も様々な立場で支援していただきたいと思います。

活動報告

第7回オリンピック教育フォーラム

筑波大学体育系、CORE 事務局 村上 祐介

平成 28 年 2 月 17 日、筑波大学東京キャンパス文京校舎を会場に、第7回オリンピック教育フォーラムが開催された。

附属学校からの実践報告では、附属小学校と附属桐が丘特別支援学校から報告が行われた。附属小学校では、道徳の時間を通して、差別をなくし公平な態度や心情を養うことをねらいとした授業が行われた。特にパラリンピックのメダルを増やすための選手強化の新聞記事に触れ、オリンピックとパラリンピックの様々な違いについて児童自身が考える学習が展開された。意見が異なることを前提に児童主体の様々な議論がなされ、オリンピックやパラリンピックの諸問題について考える良い機会となるとともに、関心を高める上でも有効な授業となった。一方、筑波大学附属桐が丘特別支援学校では、これまでにパラリンピックへ出場する選手を輩出してきた経緯から、パラリンピックを身近なものとして捉え、ボッチャなどの競技種目が体育の授業で取り入れられていた。また体育祭では、障害の特性や程度に合わせた活動を様々な取り入れる特色ある体育祭が行われた。新しい競技種目を教員と児童生徒が共に考える機会を作ることで、児童生徒がスポーツについて考える取り組みを促し、また、その試行錯誤の過程は、パラリンピックの理念につながるものであり、教育的に意義あるものであった。加えて、オリンピックの教育的価値の一つであるフェアプレーについて、ポスターやエピソードなどを踏まえ学習する様子が報告された。

その後、筑波大学理療科教員養成施設長である宮本俊和氏より、視覚障害者のパラリンピックスポーツについての報告が行われた。パラリンピックにおける視覚障害者の競技種目の紹介や、具体的な競技ルールや用具など、実際に携わっている立場から興味深い内容が報告された。また、現在の我が国の視覚障害の基準とパラリンピックにおける基準が異なることなど、視覚障害者のスポーツ参加やパラリンピックへの参加における問題点についても紹介された。さらに、視覚障害者のスポーツの普及について現状の課題が報告され、パラリンピックムーブメントへの期待が話された。

最後に、筑波大学理事・副学長、附属学校教育局石隈利紀教育長より講評があり、それぞれの取り組みが、共生社会に向けた一つの柱となりうる事が確認された。

開催概要

1. 日時：2016 年 2 月 17 日（水）18：00～19：30
2. 場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎 1 階 134 講義室
東京都文京区大塚 3-29-1（丸ノ内線茗荷谷駅下車「出口 1」徒歩約 2 分）
3. プログラム（変更の可能性あり）：
 - 18:00～18:05 開会挨拶 石隈利紀（筑波大学副学長理事、附属学校教育局教育長）
 - 18:05～18:20 平成 27 年度 CORE 事業報告
真田久（筑波大学体育系、CORE 事務局長）
大林太郎（CORE 事務局）
 - 18:20～19:00 附属学校実践報告
 - 1) 筑波大学附属小学校
 - 2) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校
 - 3) 今年度の附属学校における指導案・活動計画案について
 - 19:00～19:15 「視覚障がい者のパラリンピックスポーツ」 Rio de Janeiro について
宮本 俊和（筑波大学理療科教員養成施設長）
 - 19:15～19:30 ディスカッション
閉会挨拶

活動報告 ▶

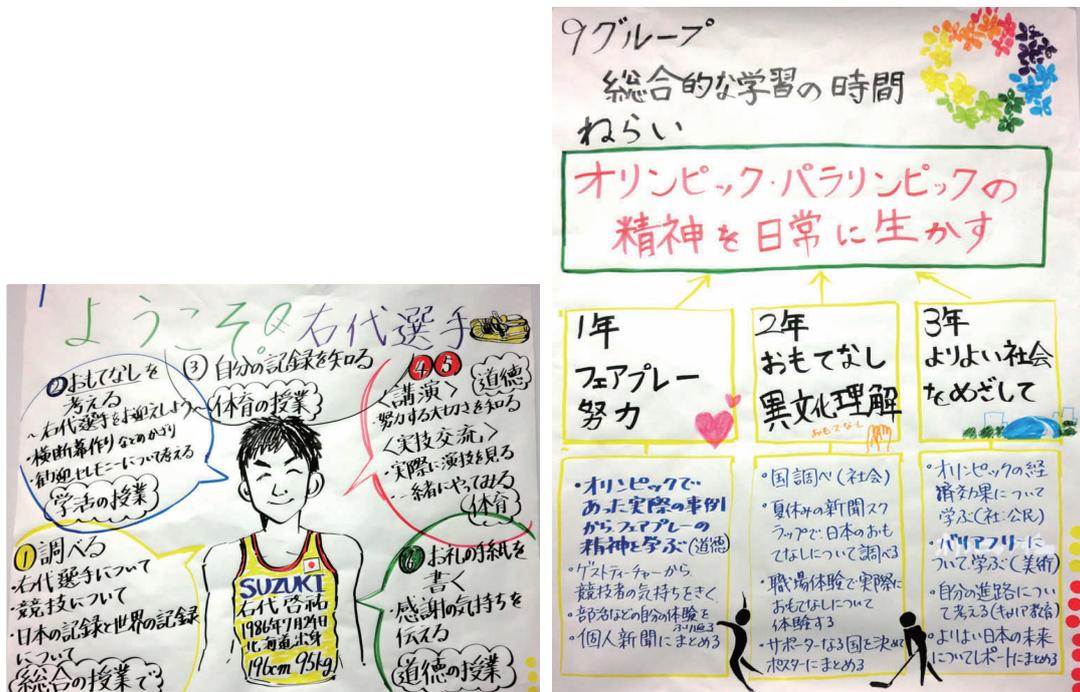
第2回オリンピック・パラリンピック教育授業づくりワークショップ報告

筑波大学体育系、CORE事務局 宮崎 明世

2015年7月24日(土)、筑波大学東京キャンパスにおいて、第2回オリンピック・パラリンピック教育授業づくりワークショップを開催した。このワークショップは、2014年12月に開催された第1回に続き、文部科学省の共催、東京都教育委員会の後援のもと、おもに教員を対象として行われた。参加者は54名で、その内訳は小学校39名(72%)、中学校6名(11.1%)、高校3名(5.6%)、大学2名(3.7%)、特設支援学校2名(3.7%)、その他2名(3.7%)で、その他の参加者は県の教育行政担当者であった。第1回ワークショップの参加者アンケートをもとに、夏休みが始まってすぐの土曜日に設定したこと、学校でのオリンピック・パラリンピック教育のニーズが高まっていることなどから、早い時期から応募が集まった。当日は、真田 CORE事務局長の講義に続いて、第1回の参加者の中から3校の実践報告を行い、あらかじめ校種や年齢をもとに決めておいたグループで、グループワークを行った。グループワークでは、日頃の情報交換を行うとともに、各学校で活用できるような指導計画を作成し、ポスタープレゼンテーションを行った。話し合いは順調に進み、ポスター製作も時間内に十分に納められたグループが多かった。

グループワークの結果作成された指導計画は、それぞれの学校種を対象に、さまざまな授業形態を複合的に使う計画が多く、学校全体で取り組むような計画もあった。すべてのグループで総合的な学習の時間の活用が含まれており、ホームルーム、学校行事、アスリートの講演会、体験学習、日常生活における活用などがあつた。ねらいとしては、食文化などの文化についての学習を通じた国際理解、2020年に自分が何をしているかを考えて生き方を考える、スポーツを通して交流する、オリンピック・パラリンピックの精神を学んで日常生活に生かす、スポーツのフェアについて考えさせる、などであった。小学校では低・中・高学年、中学校では学年ごとにそれぞれの発達段階や教育の蓄積が考慮された課題を設定し、学校全体で教育の実践にあたるような計画もあった。

事後アンケートによれば、グループワークで他の学校の実践例を聞いたりアイデアを出し合ったりしたことが好評であった。プレゼンテーションを行って各グループの指導計画を共有したが、これも好評であった。今後はこのような参加型のワークショップを継続するとともに、成果を各学校に持ち帰って実践し、報告しあうような会に発展させたいと考えている。



ポスタープレゼンテーションでの発表例

第10回国際ピエール・ド・クーベルタン ユースフォーラム

筑波大学附属高校、CORE 運営委員 中塚 義実

1. 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム (YF) とは

近代オリンピックの創始者クーベルタンの思想「オリンピズム」を世界中の高校生とともに学び、交流を深める機会が2年に1度設けられている。国際ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CIPC) 主催の標記フォーラムは1997年に始まり、世界中の「クーベルタン・スクール」が持ち回りでホスト役を務める。参加国は当初、ヨーロッパ諸国が中心であったが、回を重ねることにネットワークが広がり、日本からも第7回大会から生徒を派遣している。

国際ピエール・ド・クーベルタン YF

第1回	1997年	ル・アーブル (フランス)
第2回	1999年	マッチ・ウェンロック (イギリス)
第3回	2001年	ローザンヌ (スイス)
第4回	2003年	アレンツァーノ (イタリア)
第5回	2005年	ラートシュタット (オーストリア)
第6回	2007年	ターボル (チェコ共和国) …日本に紹介
第7回	2009年	オリンピア、パリニ (ギリシア) …日本初参加 (都立国際高校)
第8回	2011年	北京 (中国) …筑波大附高が初参加 (2名)
第9回	2013年	リレハンメル (ノルウェー) …第8回に同じ
第10回	2015年	ピエスタニ (スロバキア) …日本代表7名 (うち3名は筑波大附高)

筑波大学オリンピック教育プラ

ットフォーム (CORE) 設立以降、本フォーラムへは筑波大学附属高校の生徒を派遣するようになった。第9回大会までは生徒2名のオブザーバー参加であったが、参加生徒が高評価を得たこともあり、第10回大会では7名のフルメンバーでの参加がCIPC から要請された。

2015年3月に筑波大学で開かれた「クーベルタン・嘉納ユースフォーラム2015」(CORE主催)は、オリンピズムを高校生が学ぶ場として企画されたものであるが、国際YFへの派遣生徒7名の選考もここで行うこととなった。選考された7名の内訳は、筑波大学附属高校3名、自由学園男子部・女子部、帝京高校、中京大中京高校から各1名である。筑波大附属高校からは3年生の阿部正彦、平田東夢、2年生の高橋優衣、引率教諭として中塚義実が参加した。報告者は第8回大会から3回連続の参加となる。

本報告では過去の国際YFの様子も含めて、第10回大会について記す。

2. 第10回大会概要

10回目となる今大会は、スロバキアの温泉保養地ピエスタニにあるクーベルタン・スクール (Gymnázium Pierre de Coubertin Piest'any) をホスト校として、2015年8月29日 (土) から9月5日 (日) まで開かれた。アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ブラジル、チェコ、エストニア、フランス、ドイツ、イギリス、ギリシャ、イタリア、日本、ケニア、マレーシア、ノルウェー、ロシア、南アフリカ、スロバキア、ジンバブエの19か国21校から110名、ホスト校のボランティアを含めると約150名の高校生が参加した。

日本からの派遣団は8月27日 (木) に成田を発ち、中継地のウィーンで2泊して準備を整え、現地へ乗り込んだ。主なスケジュールを以下に記す。

- 8月27日 (木) 11:20 成田空港発～15:20 ウィーン空港着 (時差は7時間)
- 8月28日 (金) ウィーン市内観光、パフォーマンス準備など
- 8月29日 (土) バスでウィーン～ブラチスラバ～ピエスタニへ。ディナー
- 8月30日 (日) 市内観光、障がい者スポーツの体験、開会セレモニー
- 8月31日 (月) ワークショップ①、グループ討議①、知識テスト、miniEXPO
- 9月1日 (火) 水泳、スポーツテスト、ワークショップ②、ディスカッション②、スロバキアダンス
- 9月2日 (水) サイクリング、ワークショップ③、ディスカッション③、アートパフォーマンス発表会
- 9月3日 (木) クロスカントリー、古城観光、市街パレードとパフォーマンス
- 9月4日 (金) カヌー体験とビーチ活動、閉会セレモニー、パーティー
- 9月5日 (土) 早朝に出発、バスでピエスタニ～ブラチスラバ～ウィーン、13:20 ウィーン空港発

活動報告 ▶

9月6日(日) 7:00 成田空港着(約11時間のフライト)、解散

3. 国際 YF におけるオリンピック教育

国際 YF の内容や主催者からのメッセージから、オリンピック・パラリンピック教育のなかがみ可以理解できる。もう少し詳しく見ていきたい。

1) 「クーベルタン賞」について

国際 YF の中核プログラムは、「クーベルタン賞」をめぐるコンテストである。毎回、以下の項目で構成されている。

- ① The Knowledge Test (知識テスト)
- ② The Sports Competitions (スポーツテスト)
- ③ The Social Performance (社会貢献活動)
- ④ The Arts Performance (アートパフォーマンス)
- ⑤ Olympic Values (グループ討議)

各項目のなかがみは毎回少しずつ異なるが、5本柱は変わらない。身体、意志、知性 (Body, Will and Mind) のバランスのとれた人間形成が志向される。

参加者全員にクーベルタン賞が与えられるわけではない。クーベルタン賞を得るために努力する姿勢、挑戦する姿が求められる。また諸活動を通して仲間を思いやる気持ちや態度が称えられ、ミーティング等で紹介される。オリンピックの価値である「卓越・友情・尊重」がフォーラムの底流に流れている。

第10回大会における「クーベルタン賞」の内容は次のとおりである。

- ① The Knowledge Test (知識テスト)
クーベルタンの生涯や功績、古代および近代オリンピック競技会についての知識テストは、事前学習が重要である。1度でクリアできなかった生徒には再試験の機会もある。
- ② The Sports Competitions (スポーツテスト)
60m 走、走幅跳、バスケットボール連続投げ (シュート板にボールを当てて一定時間内に連続スロー)、クロスカントリー、水泳 50m 自由形は、全員必修である。いずれも標準記録が設けられ、3種目で記録を下回るとクーベルタン賞はもらえない。
アフリカからの参加者の中には「川遊びをしたことはあるが、きちんとした泳法で泳いだことがない」者もいた。それでも 50m のスタートラインに立ち、挑戦する。5m で溺れてしまうが、そこからスタッフの背中に乗って 40m 先まで移動、最後の 5m を再び自力で泳がせていた。挑戦することの重要性を強調していたのが印象的であった。
- ③ The Social Performance (社会貢献活動)



知識テストの様子



クロスカントリーのスタート風景



スタッフのサポートで 50m を完泳!

この課題は、事前にボランティア活動に取り組み、校長先生の証明書を提出する形である。筑波大附高の生徒3名は、東日本大震災の被災地で採れた農作物の販売ボランティア、マラソン大会のボランティア、出身中学の部活動指導などに取り組み、校長に説明し、証明していただいた。

④ The Arts Performance (アートパフォーマンス)

第9回大会までは参加校が事前に準備してきたものを披露する場であったが、第10回大会では、音楽や絵画、ダンスや演劇など8つのワークショップに分かれ、選択した多国籍の仲間とともに作品づくりに取り組むものとなった。

この方が、多くの国の生徒と交流できるし自分の個性を発揮できるのでよいと思った。アートパフォーマンス発表会は、国際YFの山場である。

⑤ Olympic Values (グループ討議)

アートパフォーマンスのグループで計3回行われ、「オリンピック精神」「スポーツの意義―架け橋」として「平和への貢献―自分たちにできること」について英語で討議した。

これに加え、各参加校は事前に、'Sport has its own language, and everyone can speak it. It's a language of hope, where anything is possible' のメッセージに即したポスターをA3判4枚以内で作成した。各校のポスターはフォーラム期間中、会場に掲示された。

2) スポーツ・文化交流活動

オープニングセレモニーの前に、ホスト校の体育館にて障がい者スポーツを体験した。アイマスクをしたままボール競技やリレーをしたり、履いている靴を使ってポッチャを体験するなど、簡単にできる工夫が為されているのが印象的であった。

障がい者スポーツの体験プログラムは、国際YFでは必ず含まれており、生徒たちにとってはよい経験になっている。

文化交流活動として北京大会から取り入れられたのが「ミニエキスポ」である。国ごとに1つのテーブルを与えられ、そこで各国の文化を表現し、参加者と交流を図るものである。日本チームは「夏祭り」をテーマにブースを設定し、多くの参加者と交流した。自国の文化を学ぶ機会でもあり、たいへんよい企画である。

ピエスタニ市街地へのパレードと市民に対してのパフォーマンス（日本はソーラン節を披露）、毎夜開かれたダンスパーティなど、高校生が相互に、あるいは市民と触れ合う機会も多く設けられた。

スロバキア観光も、市内の散歩からサイクリング、さらに



日本チームのポスター



アイマスクをしての球技体験

活動報告 ▶

バスを借りて参加者全員で古城（スモレニース城）へ出かけることもあった。

ホテルでは国籍の異なる3～4人が同室で過ごす。あらゆる活動を通して生徒たちはオリビズムを学び、異文化を理解しながら互いに交流を深めていくのである。

4. 参加生徒の感想より

アートワークショップは、私のスロバキアでの一番の思い出と言っても過言ではないほど楽しかった。私は modern dance 1 のグループでダンスを練習した。ダンスを通して色々な国の友達と一つになれるのがとても嬉しくて楽しかった。

ディスカッションは全然話せなかった。周りの英語力に圧倒されてしゃべりだす勇気がなかった。やっぱり自分は日本人なんだと心から感じた。日本人は shy だと思われてしまったかもしれない。しかし、アートワークショップと同じグループだったおかげで、すごく安心感があって楽しかった。ディスカッションが早く終わってしまった後にゲームをやったりして和やかな雰囲気だった。

ミニエキスポは日本を最高にアピールできた時間だった。射的も浴衣もけん玉も折り紙も大好評だった。沢山の人が日本のコーナーで楽しんでくれているのがとてもうれしかった。みんなで案を出し合っただけで買って出し出して苦勞して準備した甲斐があったと思った。

色々な国の友達といっぱい交流して初めての経験を沢山して、今までの自分の価値観がいい意味でぶち壊されて一皮むけた気がした。将来への考え方も変わったし少し大きかかもしれないが、このフォーラムで人生が変わった。本当に参加できてよかった。支えてくださった方々には心から感謝している。(高橋優衣)

5. おわりに

私にとってこのフォーラムは3度目となるが、毎回テーマを抱えて参加するようにしている。初参加の2011年(北京)は、「オリンピック教育が、世界でどのように展開されているのか」を見てくることがねらいであった。そして「そういうことなら日本ではすでにやっているよ」と思い、日本からの情報発信の必要性を感じた。一方、自国の歴史についての教育が日本では不十分であり、嘉納治五郎の思想と功績について、オリンピック教育としてもっと取り上げるべきだと思った。

2013年(リレハンメル)は、「日本で何が出来るか」を考えながら参加した。クーベルタンスクールとなることよりも、クーベルタンや嘉納治五郎の思想を、日本の高校生に伝えるための国内 YF を開くべきだと感じた。シャイのようにみえる日本の高校生は、外部の人と接する機会が少ないだけなのではないか、海外の高校生と交流する前に国内の高校生同士が交流する場を設けたいと考え、帰国後、さまざまな方面に働きかけるに至った。これがクーベルタン-嘉納ユースフォーラム2015につながっていったのである。

今回の私のテーマは、「この営みをどう広げ、続けていくか」ということであった。このテーマについての解決策はまだ見えない。

高校生年代の「オリンピック教育」をどのように展開していくかを、長い目で考え、創り上げていく必要がある。2020年の



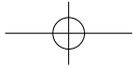
ミニエキスポ。日本のブースは大盛況



参加者全員で（スモレニース城にて）



日本チームの7名（ピエスタニを象徴する「温泉治療で杖がいなくなった人」像の前で）



東京オリンピックは“きっかけ”であり“節目”であるが、オリンピックやパラリンピックがあるから「オリンピズムを教育に」と言っているのではない。オリンピズムはもっと普遍的な思想として位置付けられるべきである。

「オリンピック・パラリンピック教育」との表現は、競技会のための教育のようにも見える。「オリンピック教育」という表現も本当は不要で、単に「教育」でよいのではないか。ただし“真の”教育である。

クーベルタンも嘉納治五郎も、“真の”教育を求めていたのではないだろうか。それは、心と体と知性のバランスのとれた人間の育成であり、世界平和につながる理念なのである。

活動報告 ▶

オリンピック・パラリンピック教育研修会

筑波大学附属学校教育局 今井 二郎

2015年8月28日（金）、筑波大学附属中学校・高等学校「桐蔭会館」を会場に「オリンピック・パラリンピック教育研修会」が、附属学校および都内等小中学校、教育行政関係者108名が参加して開催されました。

2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、東京を中心に全国各地でオリンピック・パラリンピック教育が進められています。しかし、実際には、「何を行えばよいか分からない」などの声も少なくありません。そこで本研修会では、2020年に向けてオリンピック・パラリンピック教育をどのように進めていくべきか、今後の教育活動で求められる内容や視点について、オリンピックとパラリンピアン立場から、そして東京大会を底辺から支える市民レベルの「おもてなしの心」の面からの講演を聞いて考えてみました。また講演講師のパネルディスカッションでは、フロアからの活発な意見や提案などがありました。

参加者からは、「講師の方々の多様な事例報告を交えた講演で大変参考になりました。」「オリンピック・パラリンピック教育の意義・価値について分かりやすく学べ、今後の教育活動にしっかり生かしていきたい。」との声があげられ、今回の研修会を通じて2020年東京大会に向けて、オリンピック・パラリンピック教育活動がさらに推進されることが期待されています。

開催概要

1. 日時：2015年8月28日（金）13:30～16:30
2. 場所：筑波大学附属中学校・高等学校「桐蔭会館」
3. プログラム 進行：松本 末男（筑波大学教授・教育長特別補佐）
 - (1) 主催者挨拶 石隈 利紀（筑波大学理事・副学長・附属学校教育局教育長）
 - (2) 「大学から発信するオリンピック・パラリンピック教育」 真田 久（筑波大学体育系教授）
 - (3) 「オリンピック・パラリンピック教育に期待すること」 山口 香（筑波大学体育系准教授）
(ソウルオリンピック女子柔道銅メダリスト)
河合 純一（日本パラリンピアンズ協会会長）
(アテネパラリンピック水泳金メダリスト)
 - (4) 「グローバルマナーとおもてなしの心 ～2020東京オリンピック・パラリンピックに向けて～」
江上 いずみ（筑波大学客員教授）
 - (5) ディスカッション 司会：甲斐 雄一郎（筑波大学教授・附属学校教育局次長）
4. 参加者 108名 内訳：附属学校教職員 85名、
一般参加 23名（小学校6、中学校4、特別支援学校4、大学1、教育行政4、企業2、その他2）



講演（山口 香氏）



会場の様子

ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会における教育プログラム

CORE 事務局 大林 太朗

1. 調査概要

この度、2015年7月10～17日の日程で、2012年ロンドン大会における教育プログラム“Get Set”の内容に関する調査を行った。とくに、教育プログラムの内容・教材、スケジュールや大会後のレガシーについて調査を行い、2020年に向けた日本のオリンピック・パラリンピック教育の全国的展開に有意義な示唆を得た。主な調査先（敬称略）は以下のとおりである。

- ・ EdComs 社
Nick Fuller (London 2012 組織委員会教育部門長)
Kathryn McColl (London 2012 組織委員会教育部門マネージャー)
- ・ Park House School オリンピック・パラリンピック教育実践校 (中等教育学校)
- ・ William Bellamy Primary School オリンピック・パラリンピック教育実践校 (初等教育学校)
- ・ Much Wenlock Games

2. “Get Set” の内容及びスケジュール

ロンドン2012組織委員会が推進した“Get Set”は、3～19歳を対象とし「英国全土の若者に創造力を与え、スポーツ、教育において個々の力を存分に発揮させ、大会で何らかの役割を担う機会を与えること」を目的としていた。その根幹には、オリンピックバリューとパラリンピックバリューを合わせた7つの価値：尊敬 (Respect)、卓越 (Excellence)、友情 (Friendship)、決断 (Determination)、勇気 (Courage)、平等 (Equality)、鼓舞 (Inspiration) が据えられ、各教育実践はそれらの価値との関連を明確にすることで、オリンピック・パラリンピック教育として位置付けられていた。

“Get Set”では、各学校の教員や教育関係者がWebの専用プラットフォームにアクセスし、オリンピック・パラリンピック教育のための基礎的な知識情報やアスリートのパフォーマンスやメッセージの動画、双方向型の体験ゲーム、活動やプロジェクトのアイデアを入手し、各々の学校に合った教育プログラムを考案した。

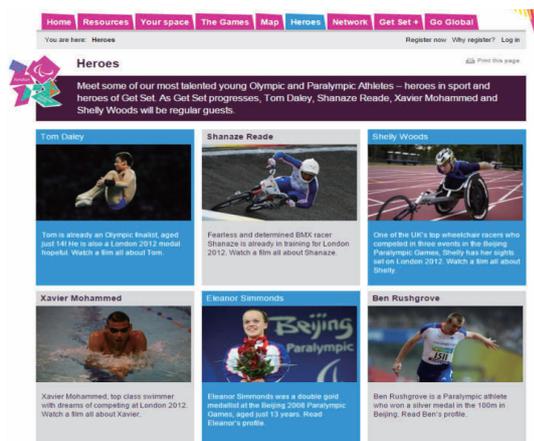
2008年9月に開始されて以降、“Get Set”は“Get Set+” (2008年9月～)、“Get Set Network” (2009年9月～)、“Get Set Global” (2011年11月～)と展開した。それぞれの内容について、下記に整理する。

① “Get Set+” (2008年9月～)

“Get Set+”は、大会スポンサーとパートナー企業が学校や地域における教育プログラムに参画するプログラムのことである。例えば、パラリンピックのスポンサーを務めた大手スーパーマーケット Sainsbury's は、「100万人の子どもたちにパラ・スポーツの体験機会を提供する」ことを目標に掲げ、“1 Million Kids Challenge”キャンペーンを実施し、学校等に対してパラ・スポーツの体験に必要な用具等のツールキットを無償提供した。また、エネルギー系企業 EDF は環境教育プログラム“THE POD”を展開し、オリンピック・パラリンピックのアスリートを活用して生徒が「省エネ」「ゴミ削減」「リサイクル」「生物多様性」について理解を深める教育プログラムを提供した。

② “Get Set Network” (2009年9月～)

“Get Set Network”は、英国全土の学校が“Get Set”への参加を登録するシステムの名称である。各学校は独自のオリンピック・パラリンピック教育の実践に関する計画や成果を提出することにより、組織委員会との直接的な連携のもとでプログラムを推進することができた。とくに、組織委員会の公式「教育ロゴ」の使用が認められ、教育ツールキットの配布や観戦チケットの優先的な手配



Get Set ウェブサイト

活動報告 ▶

等、登録校には様々な特典が付された。なお、2012年の大会開催時には英国全土で20,000校以上の学校が登録された。

③ “Get Set Global” (2011年11月～)

大会開催まで1年を切ったタイミングで、“Get Set Global”と名付けられた国際的な感覚を養うことを目的とした教育プログラムが開始された。具体的には、The Olympic Truce (オリンピック休戦プログラム)、Get Set to Support a Team (学校が任意で国・地域を選定し応援するプログラム)、World Sport Day (民間企業との連携によるスポーツを通じた国際交流のプログラム)が展開された。

3. “Get Set Network” 登録校における教育実践

① 中等教育学校における事例

ロンドン西部郊外に位置する Park House School では、“Get Set Network”の登録校としてオリンピック・パラリンピック教育を継続的に実践している。学校の教育理念にオリンピック・パラリンピックの7つの価値が据えられ、具体的な取り組みとしてオリンピック、パラリンピアンとの交流会や特設ボードの設置、著名な画家の作風でアスリートを描く美術の授業、モンゴルの学校との Skype を通じた異文化交流などが行われた。また、School Assembly (校内集会) では、オリンピック・パラリンピックの価値を普段の学校生活の中で体現した生徒を表彰するという制度があり、教科や課外における多様な教育実践がみられた。

② 初等教育学校における事例

ロンドン東部に位置する William Bellamy Primary School では、とくに学校体育においてオリンピック・パラリンピックを題材とした授業が行われていた。右の写真は、パラリンピック種目のゴールボールの体験講座、その他 Get Set のウェブサイトからの教材 (カードゲーム等) を活用した教育実践が展開されていた。

4. 調査総括

ここまで、ロンドンオリンピック・パラリンピックにおける教育プログラムの枠組みと実践例について概観した。学校と民間企業による協同的教育実践や、ウェブ上の登録システムを通じた組織委員会による学校の包括的なネットワーク化は“Get Set”の特徴的な取り組みであろう。また、登録校に対する様々な特典は、英国全土におけるオリンピック・パラリンピック教育の普及に大きく貢献したとみられる。

一方、本調査の限りでは、“Get Set”の課題として、ネットワークに登録した各学校がウェブ上のオンライン (デジタル) 教材をいかに活用するのか、またそれを教育カリキュラムにどのように位置づけるのかについて、必ずしも専門的な指導や統括が十分でなかった可能性が示唆された。学校教員を対象とした教育研修会も、本調査の限りでは実施の確認はできていない。今後、2020年東京大会に向けて日本全国で教育実践を推進するためには、IOCのオリンピック教育プログラム (OVEP2.0等) と学習指導要領との関連を明確にするとともに、国や各都道府県の教育委員会における共通理解の上で、各学校種の教育現場に具体的な内容を展開していくようなスキーム作りが重要となる。



特設ボード



ゴールボール体験

リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会における教育プログラム

筑波大学体育系、CORE 事務局 荒牧 重衣

1. 「トランスフォルマ (Transforma)」とは

トランスフォルマは、2016年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会（以下、ROCOG）が主体となって実施する教育プログラムである。リオデジャネイロ市を中心に、ブラジルにある7歳から19歳が在籍する学校で開催されている。

大会の開催を翌年に控えた現在も、ブラジルにおけるオリンピック・パラリンピックに対する関心は高いとは言えない状況が続いている。その主な要因として、サッカー、バレーボール、バスケットボール、ハンドボールというブラジルにおける4つのメジャー・スポーツ以外の競技に対する理解の不足がある。これまで、ブラジルの学校教育で実施されてきたスポーツは、施設や設備等の関係からこの4競技に偏るものだった。ブラジルでは、1996年に体育が必修化されたものの、体系的なカリキュラムが普及していたとは言い難く、多くの学校では先述したような人気の高いスポーツを行うのみという状態が続いていた。

そこで、トランスフォルマでは、オリンピック・パラリンピック競技大会で実施される競技を体育の授業に取り入れること、そして、そのプロセスを通じて、より豊かな健康の獲得を目指すとともに、オリンピックとパラリンピックの価値を伝えることをねらいとしたプログラムが考案された。

トランスフォルマは、ROCOGがブラジル政府、リオデジャネイロ州、リオデジャネイロ市の支援を受けて運営し、ブラジル国内のスポーツ競技団体の協力のもとに実施されている。本報告では、2015年7月29日から8月4日に実施した現地調査の結果から、体育教員を対象としたプログラムの内容、各学校での実践の様子について紹介する。

2. 体育教員を対象としたプログラム

トランスフォルマでは、ブラジルにある65の競技団体に依頼し、体育教員を対象とした教育プログラムが開発された。ブラジルにおいてオリンピック・パラリンピック競技大会で実施されるスポーツの多くは、体育教員にとっても馴染みが浅く、授業での取り扱い方だけでなく、そのルールや使用する用具、歴史など基本的な知識が不足していた。トランスフォルマでは、体育教員のこうした現状を解決するために、実技研修会を積極的に開催するとともに、インターネットを活用し、各種スポーツの実践に関する映像等の教材を提供する試みが行われた。体育教員は実技研修会に無料で参加することができ、さまざまな競技について学ぶ機会を得ることが可能になった。

実技研修会は、各競技団体が派遣した講師によって行われ、それぞれの種目のルール、用具の使用方に始まり、体育授業での教え方まで幅広い内容が扱われる。また、各学校において異なる施設や設備の状況も踏まえ、簡易的な用具で行う方法についても紹介されていた。例えば、ゴールボールやブラインドサッカーは、通常、専用のボールを用いて行われるが、バレーボールやバスケットボールで使用するボールをゴミ袋に入れて実践する方法が紹介されていた。トランスフォルマを通じて、学校で子どもたちがより多様なスポーツを体験できる環境づくりが進められている。



実技研修会の様子1



実技研修会の様子2

活動報告 ▶

3. 各学校での実践の様子

それぞれの学校では、実技研修会を受講した教員がリーダーとなり、その他の教員に対して新しいスポーツを教える機会が設けられている。また、学校での実践を支援するために、各地域を担当する教育コーディネーターが、授業への導入方法や授業の展開方法について、教員とともに検討しながら進めていく体制が整備されている。

リオデジャネイロ市の北西部、デオドーロ地区近郊にある市立学校 Guimarães Rosa では、トランスフォルマによって体育の授業にタグラグビーが導入された。子どもたちは、初めて目にするスポーツに最初は戸惑いを見せたものの、今では学校の中で非常に人気なスポーツの一つとなっているという。

また、トランスフォルマが導入されている学校では、パラリンピック種目も積極的に実践されている。コパカバーナにある州立学校 Colegio Estadual Pedro Alvares Cabral では、シッティングバレーボールやゴールボールが実技研修会を受けた教員によって実施されていた。この学校には、屋内の体育施設がなく、授業で取り扱える競技も非常に限定されていたが、パラリンピックの競技をルール等を工夫して取り入れることによって、天井の低い、限られた空間でもスポーツを行うことが可能となった。

さらに、トランスフォルマでは、体育授業の中に新たなスポーツを取り入れるだけでなく、学校生活のあらゆる場面において、オリンピックとパラリンピックの7つの価値を学ぶ機会を設定することが非常に重視されている。各学校には教員によって指名されたユース・エージェント（Young Agents）と呼ばれる生徒たちがおり、彼らはオリンピックやパラリンピックの価値を伝える重要な役割を担っている。ユース・エージェント自身がオリンピックやパラリンピックの価値を学び、日々の学校生活の中でこれらの価値を体現し、他の生徒のモデルとなるような行動を起こすことによって、学校全体のオリンピックやパラリンピックに対する理解を深めていくことが目指されている。



ブラインドサッカーを体験する様子
(Instituto Francisca Paulade Jesus)



タグラグビーの授業の様子 (Guimarães Rosa)

4. おわりに

リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会における教育プログラムは、州と市によって進められていたスポーツ教育事業をより加速させるものとして構築されている。例えば、トランスフォルマの一部として実施された実技研修会は、リオ市による Vila Olímpica 事業によって設置された総合体育施設を積極的に活用して展開された。この事業によって設置された市営の体育施設は、貧困地区を中心に配置されている。研修会自体は、教員を対象として行われていたが、施設周辺地域の住民にとっても新たなスポーツを目にする貴重な機会になっていることが伺えた。

実践報告

オリンピックに関わる教育活動

附属小学校 山田 誠、清水 由

1. 「パラリンピックにおける有望選手の重点強化の是非を問う」道徳の授業

平成27年10月5日の読売新聞の朝刊に、今までパラリンピックにおいては予算を均等に配分していたのを、メダル獲得の可能性が高い選手に多く予算を配分することになったという記事が掲載されていた。興味深い内容だったので、道徳の時間に6年生にこのことについて考えさせた。40名中20名がこの方針に賛成、16名が反対、残り4名がどちらとも言えないであった。

賛成理由として「メダル獲得の可能性が増すのでよい」「オリンピックが重点配分ならパラリンピックも重点配分すべき、オリンピックとパラリンピックを区別するのは障害者を差別することになる」があり、反対理由として「メダル獲得の可能性が低くても頑張っている選手がいるのだから、今まで通り予算を均等に配分すべき」があった。

実際の授業においては結論を一つにまとめることはしなかった。ただ、授業の最後に教師の考えを子どもたちに伝えた。担任である私の考えは、以下の通りである。

「障害者は健常者と違い、人生に絶望している時にスポーツと出会い、人生に新たな希望を見いだす場合が多い。健常者と障害者では、スポーツをすることの意味合いが違うこともあるので、パラリンピックの予算配分を有望選手に多くすることには疑問を感じる」

2. 上村愛子氏による講演

昨年の9月に5度もオリンピックへ出場した上村愛子氏の講演会が行われた。上村氏は、最初にモーグルという競技についてその楽しさや難しさ、世界で戦った経験やオリンピックそれぞれの大会の思い出を語って下さった。その中でも20年もの間日本の代表として競技を続けてこられたのは「夢を思い続けることであり、それが力を生む」というお話が印象的でした。

最後に、子どもたちへ次のようなメッセージをいただきました。

「今から東京オリンピックのときに何をしたいか？通訳をしてみたいか大会へ見に行きたいか、そのときにどんな人になりたいかを考えると1つの目標になります。10年後にどうなっているか考えてもわからないのですが、どうなりたいかは考えられます。未来は決まっているものではないので、東京オリンピックの時にどんな人になりたいかを考えると毎日がすごく楽しくなると思います。…大好きなことを抜けたら苦勞もあります。でも、それをさらに抜けたら笑顔になれます。是非、大好きなことを見つけて下さい。」



講演会を行う上村愛子氏



講演会の様子

附属中学校の取り組み

附属中学校 國川 聖子

平成 27 年度の本校の「オリンピック教育」を振り返ると、昨年度を踏襲しつつ、その内容について深めることができた。本校の教育課程は、「教科領域」と「活動領域」の 2 領域で構成されている。前者を「教科学習」と「総合的な学習の時間」とし、後者を「HR 活動」と「実践的活動」と区分して、全ての教育活動を行っている。以下、それぞれの領域における活動を紹介する。

1. 教科学習

保健体育科：「保健」と「体育理論」において、「オリンピック単元」と題して以下の内容を行った。

オリンピック（古代・近代）シンボル・近代オリンピックの課題や問題点・パラリンピック・ブラインドサッカー体験・パラリンピック競技の用具・パフォーマンスを支える科学・医薬品の利用・薬物乱用・アンチドーピングとフェアプレー・スポーツの価値

理科：オリンピックに関する新聞記事を用いてドーピングが紹介された。

社会科：入試問題の題材としてオリンピックが取り上げられた。

2. 総合的な学習の時間《対象者：各学年コース選択者 20～30 名》

(1) 2 年生：「1964 年にタイムスリップ～東京オリンピックと 1960 年代を考える～」

東京オリンピックそのものの学びに加え、当時の日本を知ることも課題とした。知識を得るだけでなく、グループで協力しながら課題に取り組み、その成果を皆でいかに共有するかをねらいとした。

〈学習活動〉 ①オリビズムについて 東京オリンピックの紹介

②各自の興味関心事についての調べ、発表。

③ 1964 年の流行歌を調べ、発表。遠藤大臣来校につき、大臣への質疑応答。

④オリンピック研究に携わる方のお話を聞く。

⑤オリンピックにかかわる内容についてグループ学習、プレゼンテーションの工夫。

(2) 3 年生：「スポーツを多角的にみよう～蒔田学年から広がるオリンピックムーブメント～」

オリンピックを通して、様々な視点からスポーツを捉えスポーツそのものの価値やスポーツを取り巻く環境について考え、私達自身とスポーツとの関わり方を再考し、深めていくことをねらいとした。

〈学習活動〉 ①オリンピックとは何か。各自の関心事を共有する。

②障害のある方と楽しむスポーツ体験・ブラインドウォーク・あそびを創作・ブラインドサッカー・ゴールボール・シットイングバレーボール



授業の様子 1



授業の様子 2

- ③各自の興味関心によって調べ、レポート作成。
- ④オリンピックで活躍した方から学ぶ：高橋千恵美さん（陸上競技）

3. 実践的活動

筑波大学インクルーシブ交流教育事業「サッカー・ブラインドサッカー体験」への参加。ねらいは、視覚障害者と健常者がサッカーの交流を通して互いを理解し、さらに、違いを超えて共有できるスポーツの良さを考えることであった。昨年から継続した本事業、今年度はサッカー部に加えて女子が参加し、参加者に広がりを持たせることができた。



体験の様子

4. 附属中学校としての「オリンピック教育」の拡大の可能性

今年度を振り返ると、教科学習と総合的な学習の時間において、これまでの活動を活かしてさらに充実した学びの機会を生徒達に提供することができたといえる。来年度は、改めて、「中学校」として各教科の特徴を活かした実践を具体的に把握し、また、課外活動での実践の可能性を探っていきたい。

さらには、リオオリンピック・パラリンピック開催年だからこそできる学びについても検討し、来る東京オリンピック 2020 に向けてのイメージを具体化する機会となる年にしていきたい。

附属高等学校におけるオリンピック教育の実践

附属高等学校 奥村 準子

1. 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの生徒派遣

(1) これまでの経緯

近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタンの思想「オリビズム（“身体”と“精神”と“知性”の調和のとれた人間を育て、国際理解・国際平和を進めていこうという人生哲学）」を学び、異文化理解・国際交流に貢献する人を育てることを「ねらい」とした標記フォーラム（以下「国際 YF」と表記）は、1997 年にフランスで開催されてから隔年開催されているが、本校は 2011 年の第 8 回大会からオブザーバーとして 2 名の生徒が参加している。2015 年の第 10 回大会は初めて正式参加となり、本校を含む 4 校 7 名の生徒が開催国のスロバキアへ派遣された。

(2) 大会参加に向けた準備

国際 YF へ派遣する生徒の選考は、同年 3 月に筑波大学で開催された「クーベルタン・嘉納ユースフォーラム 2015」によって行われた。同イベントは、筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）が主催、NPO 法人サロン 2002 が共催、NPO 法人日本オリンピックアカデミーが後援する形で全国から 6 校 30 名の高校生が参加し 2 泊 3 日の日程でおこなわれた。野外活動やスポーツ活動、知識テストや英語での討論などを通して、派遣する 7 名を決定した。本校から 3 名、自由学園男子部、女子部、帝京、中京大中京高校から各 1 名という構成である。

国際 YF 参加へ向け、7 名の代表生徒は 3 回のミーティングを開催して事前学習と準備を行ったが、名古屋から参加する生徒たちとの連絡をメール等で補いながら、教員側が派遣の体制作りを整えた。

以下は帰国後にインタビューした本校生徒らの事前準備に関するまとめである。

①語学面について

英語に不安があった。ヨーロッパの高校生は皆英語がしゃべれると聞いていた。また、（3 年生の 1 名は）6 月に部活を引退し、体力面での不安もあった。英語でアウトプットする機会が夏休みに得られず、英語のヒアリングは TED (Technology Entertainment Design・・・世界的に有名な講演会) を聞いて自主的に準備した。

②国際 YF で課される課題について

ポスター制作・パフォーマンス・ミニエキスポ（自国文化の発表）などが課され、事前ミーティングをチーム JAPAN として 3 回おこなった。しかし、パフォーマンスは練習する時間が不足し、現地でソーラン節の練習をした。ホテルや観光地でも音楽をかけて練習したので注目を浴びた。ポスターは（分担部分の）終わらない人が持ち帰って仕上げた。時間不足だったが、他国の準備に比べると質が高く、ミニエキスポでは「緑日」をテーマにしたが、射的やけん玉が人気だった。

(3) 参加報告

概要は以下の通り。

【日 程】 8 月 29 日（土）～9 月 5 日（土）

【会 場】 開催都市：ピエスタニ（スロバキア）主催校：Gymnázium Pierre de Coubertin Piest'any

【参加国（ABC 順）】 ※ 19 か国 21 校。参加生徒 110 名、ボランティア約 30 名

【主なプログラム】

1. クーベルタン賞に関する活動

- (1) 社会貢献活動・・・事前に行う、地域のボランティア活動
- (2) 知識テスト・・・オリビズムについての筆記テスト
- (3) スポーツテスト・・・水泳（50m 自由型）、60m 走、走幅跳、バスケのボード当て（いずれも基準値あり）
- (4) アートパフォーマンス・・・10 のワークショップから選択（ダンスや音楽・絵画などを各国の参加者とともに行う）
- (5) グループ討議・・・3 つのテーマでオリビズムについて討議

2. スポーツ活動・文化交流活動・スロバキア観光

- (1) カヌー、サイクリング、パラリンピック種目、ダンス等

- (2) ミニエキスポ … 各国がブースを設けて交流。日本のテーマは「夏祭り」
- (3) リレハンメル市民に対する各国のダンス … 日本は「ソーラン節」
- (4) 観光 … ビエスタニ市内、スモレニース城など



ミニエキスポの様子
法被や浴衣を持参して「緑日」ムードを盛り上げた。



スポーツテストの様子
ビエスタのクーベルタンズ学校には
要所にクーベルタンの顔が描かれている。



最終日の記念写真
参加生徒達が国旗をあしらったバナーを持って並ぶ。

(4) 成果と課題

参加した生徒は、「エストニアとか南アフリカとかジンバブエとか、自分が絶対旅行で行かないような国の人に出会えて、こんなに素晴らしい体験ができて、普通に生きてたらできないなと思った。いろんな国の友だちといっぱい交流して、初めての経験をたくさんして、いままでの自分の価値観がいい意味でぶち壊されて一皮むけた気がした。将来への考え方も変わったし、少し大きかもしれないが、このフォーラムで人生が変わった」と語る。引率した中塚教諭は、「高校生年代の『オリンピック教育』をどのように展開していくかを、長い目で考え、創り上げていく必要がある。2020年の東京オリンピックは“きっかけ”であり“節目”であるが、オリンピックやパラリンピックがあるから「オリビズムを教育に」と言っているのではない。オリビズムはもっと普遍的な思想として位置付けられるべきである」と語り、今後も継続的な活動が期待される。

2. スーパー・グローバル・ハイスクール (SGH) としての取り組み

(1) 「SGH スタディ」のねらいと「オリパラ」の位置づけ

2014年度より文科省の採択を受け、全国の幹事校として事業に取り組んでいる。SGHは「高等学校において、グローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身につけ、もって、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図る」ことを目標とする。本校では2年生全員が学習する「SGH スタディ」(毎週土曜日第3校時に実施)において、グループまたは個人でグローバルな課題を発見し、課題に関する調査・研究活動に取り組んでいるが、三つの課題分野のうちの一つが「オリンピック・パラリンピックにおける諸課題」である。(他二つは「地球規模で考える生命・環境・災害」「グローバル化と政治・経済・外交」である。)

実践報告 ▶

(2) 今年度の取り組み

初年度となった2015年は6クラス255名のうち73名の生徒が「オリパラ」分野を選択し、18のグループ（3～6名で構成、9名の教員が各2グループを支援）に分かれて課題研究に取り組んだ。年間スケジュールは以下の通り。

4/18・25	全体オリエンテーション ①全体概要説明、②各分野紹介、海外研修報告
5/2・9	SGH スタディのヒント ①・②担当教員による課題（例）紹介
5/16	ホームルームで振り返り→分野選択
5/23	第1分野（オリンピック・パラリンピック）の概要とメンバーの把握
5/30	自己PRとグルーピング～仲間さがしのポスターセッション（於武道館）
6/13	講演会（於桐蔭会館）講師：岸卓臣氏（日本スポーツ振興センター）
7/4	各グループで打ち合わせ（問題意識の明確化とスケジュール立案）
7/11	第1分野内でミニ発表会（各グループのテーマを全体で共有する）
9/5	夏休みの活動のまとめ、9月以降の研究計画
9/19、10/17・24・31、11/21・28、12/12	各グループの研究活動（7回）
1/9・16	中間発表準備（2回）
1/23・30	中間発表（2回）SGH 活動報告会で発表する代表グループを選考
2/6	SGH 活動報告会（代表2グループが発表）
2/20	講演会（グローバルな視点をもって活躍する卒業生からのメッセージ）
2/27	1年間のまとめ、3年次研究計画書作成（代表グループは1年次生へ向けた成果報告）

(3) 各グループの課題研究テーマ

2016年1月に行われた18グループの課題研究テーマは以下の通り。下線を付した2グループが、2月に行われたSGH活動報告会で代表発表をおこなった。

- ・ テレビでオリンピックを放映することの影響
- ・ アフリカ大陸で五輪を開催可能か
- ・ 2020年の東京オリンピックで使用される施設のその後
- ・ 日本のアスリート選手を取り巻く環境
- ・ パラスポーツを広めたい～ためしてシッティン～
- ・ スポーツの魅力と有名選手の関係
- ・ プロ野球における日本人選手と外国人選手の違い（2グループ合同発表）
- ・ スポーツの「魅力」の研究
- ・ サッカーの好プレーのおもしろさを様々な面から
- ・ オリンピズムの実現～オリンピック・パラリンピックのあり方～
- ・ 新しい障がい者スポーツを作ろう！
- ・ 体幹とは何か
- ・ 日本選手が外国に勝つためには
- ・ もし地震が起こったら東京オリンピック・パラリンピックはどうなるか？
- ・ オリンピック選手の引退後
- ・ 反オリンピックの原因、経済的効果は？ など
- ・ 東京オリンピックを見据えたインフォメーションアプリの開発

(4) SGH 活動報告会における代表発表

代表発表した2グループのうち、課題研究テーマ「パラスポーツを広めたい」に取り組んだグループについて紹介したい。同じクラスの女子5名で構成された同グループは、昨年5～6月頃にテーマ設定について非常に苦労していた。3名からスタートした当初の彼女らの課題意識は、「スポーツ振興」「ボランティア」「マスメディア」「スポーツへの関心」などであり、1名だけが「パラリンピック」に関心をもっていたようである。その後他分野から2名が合流し、研究活動が始まったときのテー

マは「スポーツを発展させる」という抽象的なものであったが、全員に共通していたのは「東京オリンピック2020を盛り上げたい!」という思いであった。そこへ保健体育科を中心とした教員集団の支援や講演会などによって、東京オリンピックとともに盛り上げるべき対象として「パラリンピック」への関心が高まっていったようである。パラリンピックスポーツに関心をもった彼女らの活動が本格化したのは9月以降である。10月に同学年の仲間へのアンケート調査などを参考に対象とすべきスポーツ種目を考え、身近な場で体験や見学ができるシッティングバレーを選んだ。11月にはシッティングバレーのサポート団体が主催する体験会に参加し、日本代表チームの試合を見学したりルール説明を受けながら自分たちで体験した。この経験を活かし、12月にはクラスのホームルームの時間をもらって体験会を開催し(写真左)、事後の意識調査を行っている。さらに、別のクラスにはポスター掲示による競技・ルール紹介を試み、その認知度についても調査をおこない、体験したクラスとの比較を試みた。手法は拙いものであるが、主体的な活動によって課題解決を試みる姿勢はパラリンピック・ムーブメントを支える貴重な活動といえるだろう。今後の最終報告が楽しみである。



ホームルームの時間を活用して、
クラス全員がシッティングバレーを体験した様子



桐蔭会館でおこなわれたSGH活動報告会で発表する様子

3. その他

本校のオリンピック教育を中心的に担う保健体育科では、体育実技や体育理論の授業の中で各担当教諭が工夫を凝らしてオリンピック教育の授業を展開している。また、2014年12月に竣工した多目的施設の桐蔭会館では、附属中学校と連携して資料室の整備を進めており、日本スポーツの発展に大きな影響を与えた嘉納治五郎と東京高等師範学校の足跡が展示され、情報発信の拠点としての役割が期待されている。

附属駒場中・高等学校

附属駒場中・高等学校 登坂 大樹

本校は中高一貫の男子校で生徒数は中学生約 369 名、高校生 490 名である。

1. オリンピック形式による体育祭

本校では毎年9月下旬に体育祭が行われている。複数競技同時進行で行うものであり本校では「オリンピック形式」と呼んでいる。クラスごとに色に分かれて同学年同士で対戦していく団体種目を午前中に、個人種目を午後の初めに、色ごとの対戦で行う種目を午後の終わりに行い、これを2日間にわたって対戦していく非常に大掛かりなものである。この行事では生徒が主体となり企画・準備・運営・片付けをしていくものであり、その運営組織を体育祭実行委員会と称している。

実施種目は以下の通りである。

- ・全体種目(全校生徒が参加、クラス対抗):ドッチボール
- ・団体種目(クラス対抗)
 - 高校生・中学3年生 : サッカー、バレーボール、ハンドボール、バスケットボール
 - 中学1、2年生 : ミニサッカー、バレーボール、バスケットボール
- ・個人種目(クラス対抗): 剣道、相撲、バドミントン、卓球、1500m リレー
- 色対抗種目 : 色対抗リレー、色対抗駅伝、クラス対抗中距離競争、綱引き、棒引き
- 特別種目 : 教員対実行委員による綱引き

(1) 体育祭実行委員会の編成

委員会は中学生・高校1年生・高校3年生は2名ずつ、高校2年生は3名の総勢46名、顧問1名の構成である。高校3年生はクラス内での選手選考等のみの参加なので、高校2年生中心の38名が実際の運営委員と言える。選出方法は希望制である。役割は下記の通りである。

- 委員長 : 委員会の開催、顧問との折衝。近隣の方への周知。体育祭当日の委員のシフト作成。
- 副委員長 : 委員長の補佐、広報の発行、体育祭当日の委員のとりまとめ
- 総務・庶務 : 各申請用紙の作成、
- 審判長 : ルールブックの作成と印刷、配布
- 受付・警備 : 保護者の受付業務統括と校舎内の警備
- 用具 : 用具の確認、点検、補修、購入依頼。
- 応援団担当 : 応援合戦のとりまとめ、確認。
- Tシャツ担当 : クラスTシャツのデザイン集約、業者への発注、配布
- 会計 : 予算の執行と管理

以上のように各内容を分担している。高校2年生と高校1年生が各1名以上入り、次年度への引継ぎも兼ねて担っている。中学生は中学3年生がスローガン垂れ幕制作、中学1・2年生は用具の整備、高校生の手伝いとなっている。

(2) 体育祭実行委員会の年間活動状況

- 4月 : 委員会の発足、種目の検討、タイムテーブルの検討
- 5月 : 各クラスへの出場選手選考、Tシャツデザインの選考依頼
- 6月 : 新種目、タイムテーブルの確定、選手の集約、Tシャツデザインの確定。用具の購入、修理、整備。
- 7、8月 : ルールブックの編集、使用物品の整理、棒



生徒によるタイムスケジュール管理

引き用竹の整備

9月 : Tシャツの配布、応援合戦の指導、ルールブックの配布、講習会の開催、土曜日練習の主導。近隣の方への「体育祭のお知らせ」の配布

10月 : 反省事項の検討、総括の作成。

11月以降: 新体制に向けての準備

(3) 体育祭当日

体育祭当日の活動としてはタイムスケジュール管理、審判団の統括、試合結果の記録、シフトの修正、用具の準備、貸出、全体種目の進行、会場設営などです。

(4) 高校体育祭実行委員長の感想 (一部抜粋)

筑駒三大行事の1つでもある体育祭の運営を主導していく責務の大変さもありましたが、学年や部活の枠を越え貴重な経験をすることができました。この経験がどこかで役立ってくれると思います。

最後になりますが、体育祭にご協力いただいた全ての方々、本当にありがとうございました。

(5) オリンピック教育として

本校の体育祭はこのような体制をとっているが、約半年の準備期間でできることではない。これまでの先輩たちの構想、準備、実施、反省に基づくものである。彼らが活動する中で特に注意していることはまず安全のことである。保健室が提供してくれる昨年度の競技別学年別傷害者数を見て傷害が多い種目は真っ先に次年度の検討種目に入る。また一般生徒に実施したアンケート(自主的に参加できたか。クラスの団結は深まったか。競技種目はどうであったか。怪我の状況についてはどうか等。)から、今年度の競技をどうすべきかを検討しおり非常に丁寧に種目・運営方法を決めていることがわかる。

本年度の実施種目にもみられるように、相撲や剣道など、一般的な運動会には見られない種目も特徴的である。過去には縄跳び(審判はつかずに連続して跳んだ回数を自己申告する形式)や陸上ホッケーも行っていた。実施までは至らなかったがスポーツ雪合戦を検討した年もあった。

また、実施に際しては事前に審判団への説明、バドミントン・剣道・相撲・ハンドボールなどは別に講習会を開きルールの周知を図っており、いかに安全にしかし充実させて実施させようとしていることがわかる。また土曜練習という時間で綱引き、棒引きの進行をすることで当日にスムーズな進行ができるように準備をしている。

2. 中学2年生総合学習で行われた地域研究の中のオリンピック研究

中学2年生は学年を24班に分けて図1のような流れで地域研究を行う。これまで平成23、24、27年の1班ずつがオリンピックについて研究している。

(1) 平成24年(2011年)

テーマは「2020オリンピック・パラリンピック 東京招致への願い」と題して研究した。彼らはオリンピック開催には賛成であったのだが、研究のポイントとして

①オリンピックの支持率について ②電力供給について ③原発事故について ④災害対策についての4点をあ

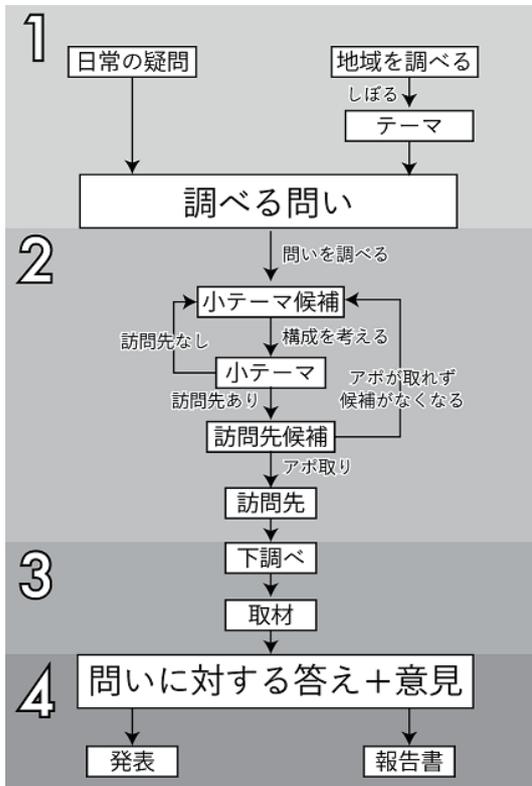


図1 地域研究の流れ

実践報告 ▶

げた。訪問先は新日本スポーツ連盟、都庁公明党控室、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会、東京建設業協会、秩父宮記念スポーツ大会、都庁共産党控室を訪問し調査をした。彼らが出した結果を引用する。

①支持率について

招致委員会の世論調査だと都内のオリンピック開催賛成は65%であるが、IOCの調査結果では47%である。また、「ライフメディアリサーチバンク」が2011年8月2日から8月8日まで調べたところ、支持率は40.7%であった。これに対する対策として、招致委員会は「アピールする」と述べているが、2012年のロンドン五輪前後でオリンピックへの関心を高めることや、地域のスポーツクラブのように、都民がスポーツと密に接せられる場所の整備といったものが大事になってくると思う。

②電力供給について

震災による影響で原子力発電所や火力発電所が壊れたり、あるいは安全点検で止まったりしている。このような状況下でオリンピックを開催すると大幅な節電や、会場の停電などという最悪の状況が生まれるかもしれない。しかし、今現在も電力の供給状況は回復しているとともに、開催は8年後であるのでおそらく深刻な状況ではないであろう。

③原発事故について

放射能問題について、東京の放射能レベルは原発事故以前の値まで戻りつつある。しかし東京は福島第一原発から200キロの距離にあり、特にチェルノブイリの経験のある欧州諸国に不安を抱かれないようきちんとした安全のアピールが必要である。

④災害対策について

万が一東京で震度7の地震が起きたらどうするのかという問題がある。

また津波被害についても心配される。

これらについて東京は

- ・2020年の東京という長期都市戦略に基づき、都市の防災能力を上げる予定である。
- ・大会で使用する施設は日本の基準の1.5倍の強度を有する施設として整備する。
- ・多くの競技施設が配置されている臨海部では、東京の最新のシミュレーションに基づく最大津波にも耐えうる防潮堤を設置している。



平成24年 オリンピック・パラリンピック招致委員会にて

参照・引用

『地域研究ガイドブック』2014 65期テーマ学習

『65期東京地域研究報告書』2012

附属坂戸高等学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践

附属坂戸高等学校 藤原 亮治

本校は2014年度より、文部科学省からSGHの指定を受け、グローバル社会に資する人材を育成する教育実践に取り組んでいる。本年度は「教科のSGH化」に向けた取り組みとして、「オリンピック・パラリンピック教育」の3カ年指導計画を作成し、初年度実施を行った。活動についていくつか紹介する。

表 筑波大学附属坂戸高等学校 オリンピック・パラリンピック教育年間指導計画書 (2015版)

学年	教科	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1学年	LHR 産業社会と人間	特別支援学校との交流学習 クラスごとで年一回附属または近隣の特別支援学校と交流												
	保健体育	バレーボールⅠ「基礎技術の理解」 ハンパリング難関チーム「ソフィアのバレーボール」 カバレッジシステムを学ぶ「カバレッジ」		自分自身の運動価値を計測 ICTを用いて「バイオメカニクス」運動経路と速度 50m走・三段跳び → オリンピアンとの動作比較分析			共同学習 事前指導 知的障害とは		スポーツ交流 Ⅰ学習Ⅰ大会		持久走 オリンピックの種目比較 社会体育・地域スポーツ参加意識の醸成		パラリンピック開催①	
2学年	自由選択科目 体育を科学する	「パラリンピック教育」スポーツを通じて共生社会について考えよう												
	自由選択科目 介護福祉基礎	バレーボールⅡ「電球運動」 「電球」 「電球」 「電球」		共同学習 事前指導		パラリンピックとは ボランティア学習 事前指導 障害者スポーツ		ADS体験学習 ADSを考えようⅠ スポーツ交流 学習Ⅱは実習		アダプテッドスポーツ を考えようⅡ in実習		振り運び パラリンピック開催② スポーツの持つ価値 心のバリアフリーと 共生社会つくりへの夢		学習成果発表準備 共同発表①(大塚) 共同発表②(坂戸)
3年次	体育	持久走 オリンピックとの身体構造比較 社会体育・地域スポーツ参加意識の醸成 個々のキャリアライフにおける社会体育・地域スポーツの位置づけ												
	体育	アダプテッドスポーツ アルティメット・インディアカ・ボウリング												
全体	課外活動・行事	坂戸市チャリティーマラソン共同開催 「校内マラソン大会」							大塚特別支援学校 青年学級交流		大塚特別支援学校 青年学級交流			

1. パラリンピアン講演

今年度は3名のパラリンピアンに講話いただいた。3名のパラリンピアンとも各授業の総括として以下観点からお話いただいた。

- 鈴木徹選手(陸上競技)・・・科目「産業社会と人間」の単元「ライフプラン作成」
講話内容：パラリンピアンのキャリア形成プロセス
- 遠藤隆之さん(元アイススレッジホッケー銀メダリスト)・・・科目「保健」の総括
講話内容：健康生活にむけた思考と選択～自身と地域社会との関わり～
- 堂森佳南子さん(車いすテニス)・・・自由選択科目「体育を科学する」「介護福祉基礎」協働単元
講話内容：障害者とスポーツ～スポーツで私が得たもの～

2. 地域スポーツ行事と共同開催する「校内マラソン大会」

本校では、毎年11月中旬に地元坂戸市の協力のもと、校内マラソン大会を坂戸チャリティーマラソンとの共同で開催している。生徒は普段かかわりの少ない、また出会うことのない地域の人々からの励ましや声援を受け、スポーツを「する人」のみでなく、スポーツを「見る人」「支える人」それぞれ多様なコミュニティが地域で関わりあっていることを体感する。こうした経験により、すべての生徒が地域社会やスポーツイベントに主体的に参画できる資質を育くむ学校行事となっている。

3. 障害者スポーツにおけるボランティア学習および交流学習

同一時間帯で開講される「体育を科学する」および「福祉援助技術」において、2科目協働型授業の開発を行った。本単元は様々な体験・交流学習をもとに「日本における障害者と健常者についての心のバリアフリーに関する課題」の解決について学習した。単元目標は以下のように設定した。

<単元の目的> 日本で行われている障害者スポーツへの理解を深める。また健常者と障害者がノンバーバルな社会環境を築くために、

- 体育を科学する・・・スポーツがどのような価値を有しているかについて考える。
- 福祉援助技術・・・現在の障害者と健常者を取り巻く社会環境について理解を深め改善を考える。

1) スポーツボランティア学習

2015年9月27日(日)に、埼玉県熊谷市で「彩の国ふれあいピック秋季大会」が開催され、科目選択者26名と有志3名が

実践報告 ▶

ボランティアとして大会に参加した。内容は ①開会式の選手誘導、②スポーツ実施会場における運営補助などである。当日は埼玉県フライングディスク協会のブースで学習を行った。開始当初は戸惑う生徒が大半であった。関わり・働きかけを難しくしている生徒に「自身の表情」「協会スタッフの関わり方」についてビデオを撮影し、その場でフィードバックを与えながら学習を進めていった。時間経過とともに協会スタッフとの関係が構築されていくと、様々な情報を引き出し、それらを駆使して主体的に運営にあたる生徒の姿が見られるようになった。またレクリエーション種目であったことから、参加者の特性にたいしてルールや働きかけを臨機応変に対応し、自然な関わりが出来るようになる生徒が見受けられた。生徒の感想からも「単に障害とくれないほど人それぞれであった」「スポーツを楽しむ姿は私たちと変わらない」「健常者がこれほど障害者スポーツに関わっていることを知らなかった」など生徒の既存概念を揺さぶる多くの経験と充実した学習を行うことが出来た。



参加者に話しかける生徒



フライングディスクを共に楽しむ生徒

2) スポーツ交流学習

筑波大学附属大塚特別支援学校の生徒（以下「大塚生」と）8月26日（水）27日（木）と10月23日（金）、11月13日（金）、2月12日（金）の計4回交流を行った。交流では、対等楽しめるアダプテッドスポーツを双方が考案しながら交流・提案する場を設けた。それぞれの生徒が身体活動（アダプテッドスポーツ）を通じて、

- ①音声言語によるコミュニケーションに頼らないノンバーバルに関わる資質
- ②ルールや用具などを工夫し、障害の有無を超えてお互いに対等の立場で楽しむ態度
- ③障害に対して外部から受動的に刷り込まれた情報と、実際の交流で得た情報のギャップや、そこに内在する社会的問題について気づき、主体的に共生社会実現に働きかけることのできる資質を育むことを期待して行われた。非常に大きな不安を抱いてスタートした本校生徒であったが、回を重ね、交流後の振り返りを重ねるにつれ「障害を個性として捉える」「スポーツはコミュニケーションツールとして言語を超えている部分もある」といったことが確認されていき、互いの関係性が大きく改善されていくこと、自身の「障害」に関する考え方が大きく変化していくことを実感できたことに生徒自身手ごたえを感じたようである。

受講した生徒からは、「障害をもつ人々について3年次に行う卒業研究のテーマに設定する」「休日に行われている大塚青年学級（卒業生の会）に主体的に参加する」「大塚文化祭に参加する」など自発的に交流を求める生徒の姿がみられるようになったことから、「心のバリアフリー」における継続的交流の成果と必要性が確認されたといえるだろう。



8月の交流の様子



2月の交流の様子



振り返りの様子

オリンピック・パラリンピック教育

附属視覚特別支援学校 寺西 真人

2015年度はオリンピック・パラリンピックに関わる競技場やロゴやドーピングのニュースが多く流れ2016年の夏にブラジルで、また東京で開催される実感が高まってきた。高等部の総合学習では国内の障害者スポーツとパラリンピックについて話をしスポーツ好きな生徒達には興味をもってもらえたのではとも思っている。小学生はパラリンピックに行きたいとスイミングに通う生徒やブラインドサッカーを運動場とする姿も見られ、2020東京に向けて少しずつではあるが変化が見受けられる様になった。

リオデジャネイロ大会の1年前から出場権を懸けて世界中で様々な競技の予選大会が行われた。本校の生徒・卒業生が関わるところでは女子ゴールボールがアジア・オセアニア大会で優勝して出場権を獲得した。この女子日本チームには視覚特別支援学校のOGが2名、在校生が1名含まれていた。この原稿を書いている時点では日本女子ゴールボールチームの代表メンバーは正式には決まっていないが複数名が含まれることになる。リオデジャネイロパラリンピックではしっかりと応援をしたいと思っている。また、水泳は2015年夏にイギリスのグラスゴーでIPC水泳世界選手権が行われ卒業生1名と在校生1名が参加した。各種目の1位2位にはパラリンピックの国別の出場枠が与えられ、国内ルールでは金メダルを獲得した場合は1年前から内定するという真剣勝負で臨む大会であった。

本校卒業生の木村敬一(東京ガス)は2種目で金メダルを獲得し、国内で1番最初にパラリンピック出場内定選手となった。



表彰後の木村選手(中央)



入場の様子タッパーと

在校生で参加した小野智華子選手はこの大会で4位、リオデジャネイロパラリンピックでは有力選手候補になると思われる。陸上のマラソンでは卒業生の堀越が有力視されている。ブラインドサッカーは残念ながら出場権を獲得することができなかった。

世界大会に参加していつも感じるのが世界のレベルアップの勢いが凄い。女子ゴールボールはロンドン大会で金を獲ったものの翌年の世界選手権ではメダルが取れず、各国に研究されていた。今回の出場も最後の1枚の切符を手に入れたが本番ではかなり苦戦が予想される。また各競技において世界は若手の選手が数多く参加しているのに対して、日本は顔なじみの選手が多い。日本のトップクラスは強いがその次に出てくる選手が見当たらない。若手の2020東京で戦える選手が少ないと感じている。

機会があるたびに声になっているが、選手育成の環境が整っていないのが最大の原因だと自分は感じている。障害者スポーツの指導者の不足、練習環境(練習場所・練習時間の確保・自己負担の増大)などが大きいと思う。よく支援学校を強化拠点と言われるが、支援学校の現状では直ぐに出来るものではないとも声を大にして言っている。トップ選手達にはサポート体制が多少なりとあるもののトップを目指したいと思う選手達には不足していると言いきって過言ではないと思う。海外選手との環境に差を感じてしまう事が多々ある。その割に周囲からは期待をされる。現場はため息をつくことが多い。そう思いながらもやはり選手育成のきっかけは支援学校の影響力が大きいと思う自分もいる。練習環境を整えるのも人材を確保するのも自治体や組織の働きかけが無い限り現状で困難と思われる。

秋に遠藤オリンピック・パラリンピック担当大臣が来校され授業や選手育成現場の視察をしていただいた。屋外12メートル

実践報告 ▶

のプールや夏は窓が小さく40度を超えてしまう体育館でのトレーニングをしている生徒達の現状を見て頂いた。



プールサイドにて



ゴールボール部員達と大臣

最近パラリンピックに関する取材や調査が多くなった。一人でも多くの方を知って頂きたい、体験して頂きたい、応援して頂きたいとの願いがあり受ける事が多い。パラリンピック本番まで続きそうだが、自分を見失わずに指導に専念していきたいと思っている。

今年のオリンピック・パラリンピック、日本の選手達の応援を宜しくお願いします。

附属聴覚特別支援学校の取り組み

附属聴覚特別支援学校 渡邊 明志

1. はじめに

今年度の本校におけるオリンピック・パラリンピック教育の活動として、「ラート運動」を取り上げることにした。この取り組みは年度末の3月に行うことになっており実践事例として報告することはできないが、本活動の趣旨について以下に記す。

2. 聴覚障害と器械運動

本校児童・生徒の聞こえない、聞こえにくいという障害特性は、これまでの指導経験からみて身体操作能力に少なからず影響を及ぼすと考えている。そこには当然個人差もあるが、できる・できないという尺度でみると運動発達がやや遅れる、あるいは未発達な傾向にあるように感じられる。

ふだんの子どもの自由な運動遊びの様子を見ると、周囲からの聴覚情報に気付きにくいがために、直線的な単調な動きあるいは近視眼的な動作・運動にやや比重が置かれているように見受けられる。聴覚障害は、身体を自由自在に操作するという点においてその感覚が身につけにくい状況にあるとも考えられ、体育科においてもそれは大きな指導課題の一つと位置づけることができる。特に器械運動などで少し慣れない（しかし習得可能な）運動動作を学習課題にあげると、まず先に不安や恐怖心を感じてしまい、結果として身体資源が十分に生かしきれないまま終わってしまうケースもある。

そこで本年度はオリンピック・パラリンピック教育の一環として、普段経験できない感覚を味わい、運動経験の幅を広げられる「ラート運動」を取り上げ、その実技授業を計画するに至った。

3. ラート運動への期待

これはドイツ発祥のスポーツであり、2本の鉄の輪を平行につないだ器具を用いて様々な体操を行う運動である。まだ全国的に広く普及はしていないが、子ども達から障害のある人まで誰もが楽しむことができ、側転や前転、後転といったダイナミックな動きや未知の感覚を味わうことができる。ラート運動の習得には一定の練習時間と身体操作の熟練を要するが、輪の中に入って人が回転する様子を一見するだけでも、オリンピック・パラリンピックムーブメントが標榜する諸価値—勇気、決心、感動—などを十分堪能することができるのではないかと期待している。

なおこの運動は、オリンピック・パラリンピック種目には入っていない。しかしすべての運動・スポーツ種目に共通する脳・神経・筋肉等の生理学的・調和的発達を促す手だてとして有効であり、また他国発祥のスポーツ理解という面においても意義のある活動ではないかと考える。これらのことを念頭に置きながら、本授業活動に取り組む予定である。



本校教員を対象とした指導者実技講習

ようこそ！先輩 オリンピアンとの交流

附属大塚特別支援学校 大宮 弘恵

1. はじめに

本校では、4年前からオリンピック・パラリンピック教育に取り組んでおり、その一環としてオリンピック・パラリンピック（以後：オリ・パラと省略する）出場選手たちとの交流を行っている。これまでの経験からオリ・パラ選手の経験談や、選手が競技生活で大切にしてきた話（「自分を応援してくれる人が大切」「苦しい時ほど笑顔で」や「挨拶を大切にしよう」など）を生徒に伝え、生徒自身が自分の中に選手の言葉を噛みしめて、これから生きるヒントや糧にしていることがわかってきた。

今年度附属大塚特別支援学校高等部では、大塚オリンピック・パラリンピック教育計画の4つの柱（見る、参加する、つくる、支える）に基づき、2つの柱を立ててオリ・パラ教育に取り組んだ。ひとつは「附属坂戸高校との交流」、もうひとつは「オリンピック・パラリンピアン（以下アスリート）との交流」である。

どちらの交流でも、身体活動（アダプテッドスポーツ）を交流の手段に用いて取り組んだ。交流の手段として、身体活動（アダプテッドスポーツ）を用いた理由は、①音声言語によるコミュニケーションを必要としないノンバーバルな関わりである、②自分の身体を動かす活動のため結果が分かりやすい、③ルールや道具などを工夫することで、障害の有無を超えてお互いに対等の立場で楽しむことができる、という3つであり、生徒同士がより主体的な関わりをもつことができると考えたからである。

ここでは、2つの軸のうちの「アスリートとの交流」の中から（今年度は4人のアスリートと交流した）、3人目の交流相手となった、アテネオリンピック男子卓球代表の新井周選手との交流について報告する。

2. 新井選手との交流会

2月24日水曜日、新井周選手との交流会は、小学部児童、高等部生徒、保護者が参加して行われた。交流会では、体育の時間に取り組んだ「卓球」「ゴロ卓」（本校発信のアダプテッドスポーツ＊詳細は後述する。）で、全員が新井周選手、エキジビションパートナーの新井愛コーチにチャレンジし、ラリーを楽しんだ。

①事前学習：坂戸高校との交流会での取り組みの経験と個別教育計画上の目標から、生徒それぞれの取り組む役割を決め、2時間（1時間＝50分）の枠で準備を行った。

グループ	担当人数	学習内容
司会グループ	生徒4名 指導者1名	・交流会の進行 ・司会原稿の準備、練習
装飾、プレゼントグループ	生徒8名 指導者7名	・歓迎パネル制作 ・めくりプログラム制作 ・プレゼント準備
紹介、インタビューグループ	生徒5名 指導者2名	・新井選手について調べる ・新井選手にインタビューする
チャレンジコーナーグループ	生徒6名 指導者2名	・新井選手にチャレンジする内容やルールを考案 ・チャレンジコーナーの進行 ・「ゴロ卓」のデモンストレーション ・審判

＊「ゴロ卓」について

【名称】卓球台の上をボールが「ころころ」転がる様子から、生徒が意見を出し合い決定した。

【ルール】生徒が、実際のラリーを行う中で起こった事象や、起こりうる事象を予測し、「こんな時はどうする？」といった話し合いを行いながらルールを考えた。



交流会当日のデモンストレーション

[交流会当日のルール説明]

ルール説明

- ・先に5点取った方が勝ちです。
- ・はじめに、じゃんけんで、サービスとレシーブを決めてください。
- ・愛コーチは一人で、大塚のみなさんは二人組でゲームをします。
- ・サービスは2本交代です。センターラインにボールを置いて、ラケットで打ちます。
- ・ボールは、ネットの下をコロコロ転がします。
- ・自分のコートからボールが落ちたら、相手の得点になります。
- ・ボールは2回までラケットで打つことができます。
- ・大塚のみなさんは、1回、自分のパートナーにパスして、相手のコートに返すことができます。
- ・ボールがネットに当たったときは、自分のコートにもどってきたら相手のポイントになります。
- ・相手のコートに入ったらラリーを続けてください。

②交流会

交流会当日は、新井周選手と新井愛コーチは大阪の自宅を5時半に出て、来校して下さった。

生徒会長の歓迎の言葉、小学部児童、高等部生徒による歓迎の歌（ソチオリンピックテーマ曲「いまさきはこる 花たちよ」）の後、生徒が事前学習で調べた「新井周選手の紹介」「新井愛コーチの紹介」が行われた。



生徒会長による生徒歓迎の言葉



歓迎の歌

紹介コーナーでは、お二人の出身地や戦績、経歴、現在の活動の他に、かなりマニアックな情報が紹介された。紹介、インタビューグループの生徒たちが、インターネットを活用して詳しく調べたことに、感動と驚きの言葉を述べられていた。



新井周選手の紹介



詳しい紹介に驚きスライドを見る

デモンストレーションの後、お二人へのチャレンジコーナーを行った。新井周選手には「卓球」、新井愛コーチには「ゴロ卓」

実践報告 ▶

でチャレンジした。アテネオリンピック日本代表、全日本卓球選手権大会男子シングルス準優勝、混合ダブルス優勝等、数々の輝かしい戦績を挙げられている新井周選手は、どんなところに打っても正確に生徒のコートに返球してくださり、時には生徒の手を取り直接ボールの打ち方を指導してくださったので、高等部生徒は、本格的な卓球のラリーを体験することができた。さらに、交流会を見学していた保護者、卓球経験のある教員も新井周選手とラリーを楽しんだ。また、高等部生徒が考案した「ゴロ卓」は、初めてプレーする小学部児童も簡単にラリーが楽しむことができた。運動量もあり、大変盛り上がった。新井愛コーチは、途中から長袖のジャージを脱ぎ、半袖で児童生徒のチャレンジを受けてくださった。ゲームの審判は担当の高等部生徒が行った。



デモンストレーション



新井周選手にチャレンジ：生徒



新井周選手にチャレンジ：保護者

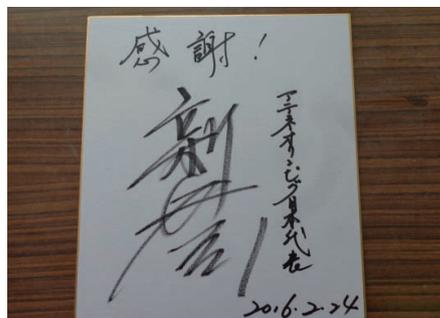


新井愛コーチにチャレンジ：小学部

新井周選手は、中国北京チームの出身で、15歳で単身来日された。名門の愛知県桜ヶ丘高校で日本での卓球選手人生をスタートした。その当時のできごとや日本の代表選手としてオリンピックに出場するまでの苦勞、選手を引退して指導者として卓球に携わる中で感じたことなどを、やさしく話をしてくださった。質問コーナーでの、母国中国と日本との違い、日本に来て苦勞したことは「食べ物」で、来日してしばらくは中華料理の「炒飯」が一番近い、「エビピラフ」を食べ続け、当分エビピラフは食べられなかったといったユーモアを交えた苦勞話や、「感謝」する気持ちについての話が生徒たちの心に残った。



新井周選手のお話



新井周選手のサイン

③事後学習

事後学習では、新井周選手のお話を、高等部生徒全員で確認した。また、新井周選手、新井愛コーチが現在活動されている「羽衣卓球スタジオ」のFacebookに、本校との交流会での感想が寄せられていた。お二人が、私たちの取り組みに「感動」や「感謝」をしてくださっていることに、生徒たちは驚き、感動していた。

【新井周選手が伝えてくれた言葉】

- 1 友だち、先生、支えてくれる方々など、自分の周りにいる人を大切にしよう。
- 2 ありがとう、ごめんなさいをきちんと伝えよう。
- 3 夢や目標をもとう。
- 4 つらいことと楽しいこと、うれしいことは表と裏。つらいことの後には必ず楽しいことが待っている。努力を続けよう。



事後学習：「羽衣卓球スタジオ Facebook」



④まとめ

このようなアスリートとの交流を通して、生徒たちは、毎回のように「夢をもつこと」「感謝すること」「周りの人をたいせつにすること」などの言葉を耳にし、これらの意味や大切さを実感することができる。遠いところから、自分たちのために朝早く出発し、楽しい時間を一緒に過ごしてもらえることに感謝の気持ちを持ち、その時間を精一杯、自分なりの表現の仕方を楽しんでいる。一方で、アスリートは、そんな生徒たちの様子を見て、モチベーションを高めるためのエネルギーを受け取っているように思う。

今後開催されるリオオリンピック、東京オリンピックに向けて、このような交流を通して、アスリートと本校の幼児、児童、生徒が Win-Win の関係を楽しんでいるのではないかと感じる。間接的ではあるが、継続していくことで、選手の競技生活を支え、貢献していけるものと考えている。



附属桐が丘特別支援学校のオリンピック教育の取り組み

附属桐が丘特別支援学校 宮内 綾香

当校のオリンピック教育は、各教科、道徳や総合的な学習の時間、特別活動において、在籍する児童生徒の実態に応じて行われている。これらの取り組みを重ねていくなかで、2020年の東京オリンピックを意識し、主体的に関わっていききたいという想いが感じられるようになってきた。なかでも、平成27年夏にイギリス・クイーンエリザベスオリンピックパークで開催されたIPC(The International Paralympic Committee) Athletics Grand Prix Final 2015 陸上競技 400 mで第7位となった高等部1年女子生徒は、パラリンピック出場に向けて、本格的に取り組んでいる。また、高等部3年男子生徒は、2015つくばグローバルサイエンスウィークにおいて、ボランティアとして東京オリンピック・パラリンピックに参加したいこと等、英語でスピーチを行った。「行う」「見る」「支える」というそれぞれの視点で、オリンピック・パラリンピックを意識するようになってきている。

今年度は、運動会と関連させた取り組みおよび給食での取り組みを紹介する。

1. 1学級1国運動および総合的な学習の時間における取り組み

まず、体育の時間に、オリンピック・パラリンピックの歴史や理念、2016年リオデジャネイロオリンピックや2020年東京オリンピックの話題に触れる機会をもった。児童生徒の実態に合わせて内容を工夫し、オリンピック・パラリンピックに関する知識を深め、異文化・国際理解に関心を向ける契機とした。

そして、小学部・中学部では、1学級1国を決め、学級の時間を活用し、その国の衣食住やスポーツ等の話題に触れ、興味関心を高め、異文化理解を深めようとする取り組みを行った。1学級1国を決める際には、児童生徒にとって身近な国々や、社会科地理的分野で扱われる国々との関連を考えて決めた。具体的には、隣国の韓国、中国をはじめとするアジアの国々、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア等の比較的好く耳にする国々である。

また、高等部では、総合的な学習の時間に、11月に行われた国際交流に向けて、まず事前に交流先の国々について調べ（国旗・通貨・国土・人口・言語・宗教・産業）、発表し合う活動を行った。そして交流当日には、それぞれの国について紹介して頂き、さらに異文化・国際理解が深まった。今年度は、ブラジル・ウズベキスタン・マレーシア・タイ・インドネシアの方々と交流を行った。



2. 運動会における取り組み

当校の運動会は、在籍する児童生徒の実態に差があるため、本校と施設併設学級で分けて実施している。ここでは、10月に行われた本校の運動会での取り組みを紹介する。

本校の運動会は、小学部・中学部・高等部の児童生徒が紅白に分かれ、勝敗を競う。競技種目は児童生徒の実態に合わせて工夫し、学部ごとに実施している。なかでも、近年、国際教育の視点から国旗を使用した競技を行っている。今年度それにあたるのが、小学部1・2年生の集団種目「Kids a small world」である。これは、五輪のマークが描かれた大きな旗に、リレー形式で国旗を貼りつけていき、制限時間内で貼りつけることのできた国旗の数を競う競技である。世界のスポーツの祭典であるオリンピックのシンボルは、学校のスポーツの祭典である運動会にもふさわしいものと考え、大きな旗の中心に五輪のマークを描いた。五輪のマークは児童にとって非常にシンプルで視覚的にわかりやすく、五大大陸の団結を意味していることから、児童の団結を深める活動として、五輪のマークを児童が手形で作成した。昨年度までは、当校に研修等で訪れ、交流した方々の国の国旗を使用していたが、今年度の「Kids a small world」で使用した国旗は、小学部・中学部の1学級1国運動および高等部の国際交流における取り組みで扱ってきた国々である。競技に出場する学年だけでなく、応援する児童生徒も視野に入れ、他学部、他学年の取り組みとの関連づけを試みた。このように、日常における学習や体験が、運動会に取り組むための児童の動機づけになっている。



3. 給食における取り組み

2016年リオデジャネイロオリンピックを意識し、給食でブラジル料理を出しました。献立は、ブラジルのチキンライス「ガリニャーダ」、豆と豚肉、牛肉を煮込んだ「フェイジョアード」、ブラジルが生産量世界第1位の「オレンジ」、(牛乳)でした。ブラジルの食に関する給食新聞が配布され、実際にブラジル料理を体験しながら、異文化理解を深めることができました。

また、2020年東京オリンピックの際には、東京の美味しいもので「おもてなし」をするという視点から、給食で東京都の特産品や郷土料理を出しました。特産品を紹介した給食新聞を確認しながら、東京にちなんだ献立を楽しみました。



附属久里浜特別支援学校のオリンピック教育の取組

附属久里浜特別支援学校 河場 哲史

本校は知的障害を伴う自閉症の子どもたちを対象とした学校であり、幼稚園と小学部だけの学校である。このような学校の実態から、本校ではオリンピック教育の目的を次のように位置づけている。

- ・健康の保持増進のために、体を動かすことに関心をもつこと
- ・身近なスポーツを通して手足の巧緻性や操作性を高めること
- ・競技のルールを理解し、他者と一緒に楽しむこと

具体的には、日々の運動活動や学校行事、地域の体育大会の参加などに、オリンピックを関連付けながら指導に当たること、少しでもオリンピックを身近に感じたり、幼児児童の運動へのモチベーションを高めたりできるように配慮をしている。子供たちは、今までの学習の積み上げから、運動すること自体の楽しさを味わったり、努力を続けることの喜びを知ったりなど、意識が年々変化してきているように思われる。今年度の実践を次に紹介する。

<神奈川県特別支援学校体育連盟主催の駅伝・ランニング大会に参加>

小学部児童4名が大会に参加した。大会本番に向けて練習を積み重ねた。実際に走る距離を体感するだけでなく、見通しをもって本番をむかえられるように、駅伝・ランニング大会が「いつあるか?」、「どこですか?」、「参加する友達や教師は誰か?」、「大会のルールはどんなものか?」などの確認も合わせて行った。本番では、練習の成果を存分に発揮し、小5女子児童が第2位、小6男子児童が6位、小5男子児童が10位、小2男子児童が19位という結果を取ることができた。結果に対する満足感を得ることはもちろん、来年に向けての目標を新たに設定することができた。後日、入賞した児童2名は教育長表彰を受けることもできた。

本校のオリンピック教育は、まだまだ試行錯誤の段階で、毎年見直しをしながら行っている。日々の教育活動にオリンピック教育の味付けを行うことで、より意欲的に活動できるようにしていきたいと考えている。幼児児童の実態を考慮しながら、今後も運動習慣を継続させることで、余暇の充実拡大にもつなげていきたい。



大学におけるオリンピック教育 筑波大学における全学対象の総合科目としての教育実践について

筑波大学体育系 嵯峨 寿

概要

オリンピックについて学ぶ機会として2003年に開講した本科目は、今年で13年目を迎えた。毎年、テーマを更新して実施しており、2015年から5年間は、オリンピック・シンボルであるfive ringsの青・黄・黒・緑・赤の各色から連想される講義を様々列挙し、その中から10編を取捨選択する試みを始めた。今年度は「青」で構成した。

各回の講義と講師

- (1) 4月13日「ファイブリング」
オリエンテーション (嵯峨 寿 体育系)
- (2) 4月20日「オリンピア」
青い海・空に囲まれたギリシャの辺境オリンピアで約1200年間続いた古代競技大会について、近代オリンピックと対比しながら特徴を学んだ。(真田 久 体育系)
- (3) 4月27日「青年クーベルタン」
クーベルタンがやがて抱くことになるオリンピックの理想形成に対し、青年期における彼の体験がいかに関係・影響したかを探った。(和田 浩一 フェリス女学院大学)
- (4) 5月11日「女性の台頭と苦悩」
女性のオリンピック参加は、「ブルーマー」の登場に代表されるようなウェアの革新によってどのように発展・変化したかを振り返った。(來田 享子 中京大学)
- (5) 5月18日「カラー柔道着」
赤黄緑などでなくどうして青色だったのか、カラー柔道着の導入をめぐる経過や議論を通じ、柔道に対する関係者の考えや価値観の多様性などに触れた。(岡田 弘隆 体育系)
- (6) 5月25日「10月10日、東京上空」
1964年大会の開会式で国立競技場を包んだ青空は何を物語るメタファーとなりうるか、多様な解釈と視点が可能性として提示された。(成瀬 和弥 体育系)
- (7) 6月1日「ブルーリボンスポーツ」
この名称で創業されたスポーツメーカーのアンブッシュマーケティングなど、オリンピックをめぐるナイキ社の市場戦略や企業行動、それに対するIOCの対応などを取り上げた。(嵯峨 寿 体育系)
- (8) 6月8日「ユースオリンピック」
14～18歳が出場する新たな大会の様々な特徴を創設の経緯・理念にまで遡って把握することにより、今日のオリンピックが抱える問題点が対比的に明らかになった。(藤原 庸介 IOC 理事)
- (9) 6月15日「サムライブルー」
国旗とユニフォームの色の親和性に逆行し、赤から青へと変えた日本サッカー界のオリンピックとの関わりを、ワールドカップと比較して捉えた。(小井土 正亮 体育系)
- (10) 6月22日「パラリンピック」
オリンピックに比べてまだ歴史の浅いパラリンピックが抱える課題と解決に向けたアイデアが、2020年東京大会を視野に示された。(斎藤 まゆみ 体育系)
- (11) 6月29日「期末試験」
期末試験

総括

「青」は、爽やかさ、透明感などを連想させることから、オリンピックの清らかなポジ面を照射し、浮かび上がらせる一方で、青年期特有の苦悩や葛藤、憂鬱（ブルー）の如きオリンピックが抱え、直面する複雑な問題に迫る切り口となる。青によって、オリンピズムやオリンピック・ムーブメントといったオリンピックの本質にいかに関わり込めるかが課題となる。次年度は「黒」を予定しており、敢えて闇や汚点を扱うことで差し込んでくる光明があるだろうか。

特別寄稿

視覚障害者のスポーツの現状と課題 視覚障害パラリンピックスポーツ

筑波大学理療科教員養成施設 宮本 俊和

1. はじめに

最近「オリンピック・パラリンピック」と言う言葉を毎日のように耳にする。

パラリンピック大会は1960年ローマ大会以降から開催しているにも関わらず、少し前までは、オリンピック・パラリンピックと続けて話をする人はほとんどいなかった。

2020年東京オリンピック・パラリンピック招致の最終プレゼンテーションを勤めた佐藤真海選手は、オリンピック選手でなくロンドンパラリンピックに出場した選手であった。

マスコミによるパラリンピック報道もあまり行われていなかったが、ここ1年の報道数は、オリンピックを上回っているとされている。

一体、何が変わったのか。東京パラリンピック招致が、我が国のパラリンピックや障害者スポーツにどのような影響を与えているのか。本稿では、障害者スポーツ、特に視覚障害スポーツに焦点を当てて記述する。

2. 今、何故パラリンピックか？

2020年パラリンピック大会の開催地に東京が決定した翌年（2014年）に、パラリンピックの所管が厚生労働省から文部科学省に移管された。このことは、パラリンピックスポーツが、これまでのリハビリテーションを中心としたスポーツの考えからオリンピックと同様の競技スポーツの色彩を強くしたことを意味している。

2011年8月に施行されたスポーツ基本法には、障害のある人を含めて、すべての国民のスポーツ権が明文化されるとともに、「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会」を目指し、国家戦略としてスポーツ施策を推進する方針が示された。

2015年10月に設置されたスポーツ庁は、「スポーツ基本法」の理念を実現するために、「スポーツ自体の振興にとどまらず、障害者理解の促進や共生社会の構築をはじめ、スポーツを通じた社会発展を図っていくこと」を使命にしている。

2016年4月1日施行された障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（いわゆる「障害者差別解消法」）は、全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障害を理由とする差別の解消を推進することを目的としている。

このように、ここ数年でパラリンピックスポーツに限らず障害者のスポーツの環境を整えて、障害者スポーツを振興することが我が国の使命になった。

3. 視覚障害者のパラリンピックスポーツ

1. 視覚障害者のパラリンピック競技

2016年9月7日から18日までの12日間、ブラジル連邦共和国のリオデジャネイロでパラリンピックが開催される。冬季パラリンピックは2018年3月9日から19日まで大韓民国の平昌（ピョンチャン）で開催される。2020年には、東京でパラリンピックが開催される。

パラリンピックは、厳格なクラス分け、競技ルール、出場条件などが定められており、一定の競技成績がなければ競技に参加できない。パラリンピック競技は、身体、視覚、知的に大別されている。また、夏季競技（22競技）と冬季競技（5競技）に分かれている（2016年3月現在）。視覚障害アスリートが出場できるのは12（夏季9、冬季3）競技である（表1）

表1 視覚障害者パラリンピック

夏季競技
陸上競技、自転車競技、馬術、視覚障がい者5人制サッカー、ゴールボール、柔道、ローイング（ボート競技）、セーリング、水泳、トライアスロン
冬季競技
アルペンスキー、バイアスロン、ノルディックスキー

リオデジャネイロパラリンピックで日本選手が出場する競技は、陸上競技（男女）、自転車（男女）、ゴールボール（女）、柔道（男女）、水泳（男女）である。

2. 視覚障害パラリンピック競技の特徴

競技を行うためには、健常者の視覚を補償する協力や視覚障害の程度に差がつかないような配慮などがされている。リオデジャネイロパラリンピックの競技について説明する。

1) 陸上競技

視覚障害者の陸上競技では「ガイド」、「コーラー」が存在する。ガイドは、視覚障害ランナーに視覚情報を補って伴走する選手をさす（図1）。コーラーは、フィールド競技で試技を行う際に方向を確認したり踏切地点を声で知らせることによりサポートする。

2) 自転車

二人乗りのタンデム自転車を使用し、前に晴眼の選手（パイロット）、後ろに視覚障害の選手（ストーカー）が乗ってタイムを競う（図2）。

3) ゴールボール

視覚障害者独自のスポーツで健常者のスポーツにはない。試合中は全員がアイシェードをつける。

4) 柔道

健常者の柔道とほとんど変わらないが、対戦相手と組んでから始まることと、試合中に両者が離れた時に、主審が「まて」を宣告し、試合開始位置に戻るなどの相違点がある。

5) 水泳

プールの壁にぶつかるのを防ぐためにタッパーが、スイマーの身体の一部（頭の場合が多い）をタッピング棒で叩いて知らせる（図3）。

4. 我が国における視覚障害者スポーツの課題

筑波大学のミッション再定義には、「障害を有するスポーツ選手の競技力向上に向けたサポート体制を医学医療系、体育系、理療科教員養成施設と連携して推進する。」ことが記されている。

私が所属する筑波大学理療科教員養成施設（盲学校高等部専攻科などで鍼灸マッサージの教科を教える教員を養成する教育施設）からは、パラリンピックソウル大会以降19人の選手がパラリンピック大会に出場し、その内9名がメダルを獲得している（図4）。本学附属視覚特別支援学校を含めると、本学は、数多くのパラリンピック選手を輩出してきた。

視覚障害者がパラリンピック選手になるためには、①選手の発掘、②育成、③強化、④パラリンピック出場、⑤キャリア支援など幾つかのプロセスを踏んで行く。（図5）。

1. 選手の発掘

選手の発掘の多くは、盲学校（特別支援学校）で行われてきた。しかし、近年盲学校に入学する生徒数の減少から有望な選手を発掘することが難しくなっている。また、盲学校の体育や課外活動で主に行っているフロアバレーボールやグラウンドソフトボールはパラリンピック競技ではないため、生徒や指導者がパラリンピックスポーツを経験する機会がほとんどないのが現状である。



図1 陸上競技 B1ランナーとガイドランナー



図2 視覚障害タンデムペア



図3 視覚障害者タッピング棒

開催年	開催地	柔道	陸上競技	自転車
2012	ロンドン	3	1	1
2008	北京	1		1
2004	アテネ	3 (銀2・銅1)		
2000	シドニー		2 (銀1)	
1996	アトランタ		1	
1992	バルセロナ	3 (金1・銀2)		
1988	ソウル	3 (金1・銀1)		

図4 パラリンピックに出場した理療科教員

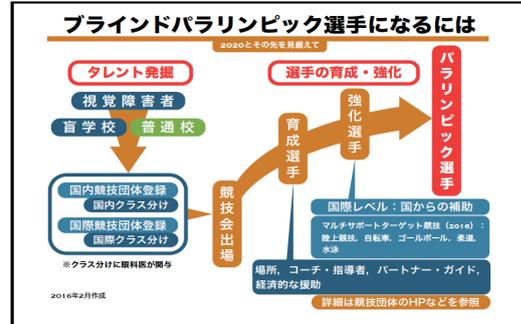


図5 ブラインドパラリンピック選手になるための過程

そのため、高校総体や国民体育大会に出場した選手の中で、視覚障害者になったものが、パラリンピック選手になるケースが増えている。今後、健常者スポーツ関係者との連携を深め、有力な選手を発掘する方法を考える必要がある。

2. 選手の育成

選手の育成は、これまで盲学校や競技団体が行ってきた。たとえば、視覚障害者柔道では、パラリンピック出場経験がある理療科教員が生徒に授業を教え、放課後には柔道を指導することが行われていた。しかし、柔道経験のある理療科教員が減少しており、このような指導体制は難しくなっている。

現在、パラリンピック選手の中には、高校総体、国体などで活躍した選手が視覚障害になり、パラリンピックスポーツやることになった者が増えている。

また、パラリンピック競技指導者の発掘と育成も急を要する課題になっている。体育の教員免許を取得する課程で、障害者スポーツを学び・体験することがないため、盲学校に赴任した体育教員は初めて視覚障害生徒を指導することになる。大半の体育教員が5年～10年以内に他の学校に移っていくために、視覚障害スポーツに精通した体育教員を育成する方法を考えなければいけない。

3. 選手の強化

パラリンピック選手の強化に関しては、財政的基盤、スポーツ環境、人的資源などオリンピックに比べかなり脆弱である。

- 1) 財政的基盤は、2020年東京パラリンピック招致以降は徐々に改善している。今まで、合宿参加費や海外遠征費など選手やスタッフの負担が大きかったが、国や企業スポンサーからの援助が増加しつつある。しかし、同じ視覚障害者スポーツでも①パラリンピック競技とそれ以外のスポーツ、②メダル獲得が期待できるパラリンピック競技とそれ以外のパラリンピック競技など財政的援助の差が大きくなっている。
- 2) スポーツ環境は、練習場や大会会場などへのアクセスや点字ブロック、音声ガイドなどの視覚障害者の配慮が遅れている。また、休日の盲学校の体育館や校庭など利用しづらい現状にある。公共の障害者スポーツ施設は少ないために、予約が取りづらい状況にある。体育施設やグラウンドなどのユニバーサルデザインを進めて、障害者がスポーツを行う環境を早急に整備する必要がある。
- 3) スポーツ選手の発掘や指導者の育成の他にも人的資源が不足している。たとえば、盲人マラソンの伴走者やブラインドサッカーのコーラーなど視覚障害スポーツをともに行う晴眼者のスタッフ育成が重要である。また、チームドクター、トレーナーなど医学的サポートもオリンピックに比べて遅れている。視覚障害教育や視覚障害補償をするテクノロジー分野の応用も遅れており、様々な分野のスタッフの総合的支援が必要とされている。

4. 選手のキャリア支援

パラリンピックに出場した後の選手のキャリア支援は重要な課題である。我が国は、パラリンピック選手の経済的補償がほとんど行われていない。障害者の就職はまだ厳しい状況にあるために、パラリンピック選手の経済的基盤とその後の職場を確保することは重要なテーマである。視覚障害パラリンピック選手は、盲学校出身者が多く、鍼灸マッサージ師の免許を持っている人も少なくない。盲学校の理療科教員として仕事をしている人もいる。鍼灸マッサージのスポーツ分野での市場を拡大して、パラリンピックを経験した選手が鍼灸師として後進の選手をサポートする道筋を作ることが重要である。

V. 筑波大学理療科教員養成施設の視覚障害スポーツの取り組み

1. オリンピック・パラリンピック選手を支援する鍼灸マッサージスタッフの養成

本施設は、盲学校高等部理療（鍼灸マッサージ）科の教員養成をしているため、卒業生のほとんどが盲学校理療科の教員となる。そのため、東京パラリンピック・オリンピックに向けた鍼灸マッサージによる競技支援スタッフを育成するためのプログラムを実施している。本学の社会貢献プロジェクトにより「パラリンピック・オリンピックアスリートに向けた鍼灸マッサージによる競技支援」と題したテキストを作成して、本施設学生のみならず全国の盲学校での講義や出前授業を実施している。

2. パラリンピック選手のコンディショニングサポート

視覚障害者柔道選手、盲人マラソン選手に鍼灸マッサージによるコンディショニングサポートを強化合宿などで行ってきた。

3. 視覚障害スポーツ選手のコミュニティ利用に関する調査研究

①パラリンピック競技、②盲学校の課外活動スポーツ、③パラリンピック競技以外の視覚障害スポーツを行っている選手・指導者に面接調査、アンケート調査などを行い、視覚障害スポーツを行う上で障壁になっている問題を抽出して、改善策を考えている。

4. ブラインドパラスポーツの情報交換会

2014年3月より、月1回、視覚障害パラリンピック選手および指導者、競技支援スタッフ、眼科医、パラリンピックスポーツやアダプテッドスポーツ関係者が集まり情報交換会を行っている。

5. 視覚障害スポーツ選手の競技力向上に関する研究

視覚障害スポーツ選手の視覚を補償するためのiPadなどのITを利用した技術開発を行っている。また、視覚障害者スポーツ選手の医科学的なデータの集積と解析を進めている。

VI. まとめ

視覚障害スポーツ選手の競技力向上に向けた支援は、視覚障害者の教育への応用につながっている。弱視者に対しては、活字や画像をどのように拡大して見やすくするか、全盲者に対しては適切な言葉による説明や模型やフィギュアを使った教材による指導など、視覚障害教育の教材の開発につながっている。

また、視覚障害スポーツ選手への研究開発や環境整備は、高齢者人口が増加して行く中で、加齢の変化による視力低下、難聴、歩行障害などに対応するノウハウを構築することでもある。

参考文献

- 筑波大学、ブラインドパラスポーツ MTG 編：2016年版視覚障がい者のパラリンピックスポーツ、2016
宮本俊和、河合純一、齊藤まゆみ：ブラインドアスリートの発掘と育成に関する現状と課題、筑波大学ブラインドパラ・ミーティング、パラリンピック研究会紀要、第5号、p43-51、2016

オリンピック・パラリンピックを通じて学ぶおもてなしの心

筑波大学客員教授 江上 いずみ

1. 「オリンピック・パラリンピック教育」講演の実際

今年度のオリンピック・パラリンピック教育は都内の全校で展開されようとしています。私は大学卒業後30年間に渡り、航空会社の国際線を乗務して様々な国の方と接し、その言語・宗教・習慣・食文化・国民性の違いを目の当たりにしてきました。国籍・文化の違いのみならず、年齢、職業や障害の有無などを含めた多様性に応じて、「機内」という一つの空間の中で多様な価値観を持つ人々と相対していくことは、時としてとても難しく感じることもありました。そのような経験を基に、現在、都内の小中高校、特別支援学校などで「グローバルマナーとおもてなしの心」をテーマに講演をしています。

「おもてなし」とは、「もてなし」に丁寧語の「お」を付けた言葉です。「もてなし」の語源は「心を持って行為を成す」という意味です。お客様に対応する扱い、待遇とも歓待とも言えます。

「おもてなし」のもう一つの語源は「表裏なし」です。つまり表裏のない「本心」で大切なお客様をお迎えするという意味になります。自分の家に訪ねてくる大切な人をお迎え・お世話することであり、相手に喜んでもらうために心を尽くすことなので、当然対価や見返りを求めない自然発生的な対応と認識することができます。

まさに2020年東京オリンピック・パラリンピックは、心を尽くした見返りを求めない対応で外国からいらっしゃる大切なお客様をお迎えすることになりますね。という話から私の講演は始まります。

そしてその大切なお客様にどのようなご挨拶をすれば「おもてなしの心」を表せるか、という話をします。耳に障害をお持ちの方は、相手が何と言っているのか、唇を読んで言葉を認識しようとする方もいらっしゃいます。もしご挨拶の言葉を言いながらお辞儀をしてしまうと、口元が見えませんがその人が何て言ったのかわかりません。この頭を下げながら挨拶の言葉を発するお辞儀を「同時礼」といいます。この方法では言葉は床の方になってしまいますね。相手の目を見て、まずご挨拶の言葉と言ってから頭を下げる「分離礼」の方が、言葉が伝わりやすい丁寧なお辞儀になりますので、是非分離礼でご挨拶しましょう。という話を講演ですと、後日、多くの学校から「朝礼の時の校長先生への挨拶が綺麗に揃った分離礼になりました」「教室での挨拶も変わり、子どもたちがとても礼儀正しくなりました」という嬉しいメールやお手紙を頂戴します。

自己を確立しつつ、他者を受容して、臆せず積極的に海外からのお客様をお迎えしてほしい、という願いを込めて、握手のルールとマナーの話もします。

日本人が握手しようとする時、「こんにちは」「よろしくお願ひします」と言いながら頭を下げて手を差し出す場面が多く見られます。でもご挨拶をするときにはアイコンタクトが大切ですね。英語で挨拶の言葉を交わしながら、笑顔で、相手の目を見て、にこやかに握手しましょう。と言って、実際に子どもたちに握手のロールプレイをしてもらいます。幼稚園の園児や小学校低学年の児童でも恥ずかしがることなく「ハロー」と言いながら元気に相手の手を握ります。

先日、肢体不自由の特別支援学校で「握手は右手でしましょう」という一般的なルールの説明をした後、右手に障害のある生徒に対し「僕は右手が使えないから左手で握手するね」と言ってにこやかに笑顔で握手すればいいのよ、と言ったら嬉しそうに左手を差し出して握手していました。

視覚特別支援学校での講演においては、「アイコンタクト」や「笑顔」という言葉の代わりに「笑声」で挨拶しましょう。という話をします。目に障害のある子どもたちも、明るい声「笑声」で表現することの大切さを学んでくれました。



都内各校での「オリンピック・パラリンピック教育」講演



特別支援学校（肢体不自由）における講演の様子

2. おもてなしの心の表し方

こういった障害の有無は「おもてなしの心」をもてるか否かに関係はありません。おもてなしとは、こういうことを言ったら相手が喜ぶだろうなあと思うことを言ってさしあげること、こういうことをしてあげたら相手が喜ぶだろうなあと思うことをしてさしあげることです。ですから皆さん全員に大切に思ってもらいたいことです。とすべての学校で子どもたちに話します。

しかし、そのおもてなしの心の表し方は一律ではありません。相手によって変わります。向き合った方がどういう方なのか、今何を欲しているかを察知して、細かいところまで配慮した対応をすることがおもてなしです。そのためには気づき大切です。どうすれば相手に喜ばれるか、その心が欠けていたらおもてなしは成り立たないのです。ということも話します。

すると先日、60周年記念式典を終えた町田市の小学校の校長先生からお電話をいただきました。「たくさんのお来賓をお迎えする際、6年生がマンツーマンで対応し、「気づき」を発揮してくれました。正門でお客様を迎えてから昇降口まで一緒に歩くその数秒で、担当した来賓の方を観察し、ご高齢の方だったらゆっくりと歩いてご案内する。杖を突いた方には靴を履き替えるときに椅子を差し出す。そういった方々には2階が上がっていただく際、昇降口近くの階段ではなく少し離れたエレベーターにご案内する。など個別に対応したところ、お客様から賞賛と感謝の言葉をたくさんいただきました」という嬉しいお話でした。

礼節を重んじ、マナーを守り、助け合って生活する国民性である日本の子どもたちが、こうした「気づき」を大切にし、異文化を尊重しながら、他者を思いやるボランティアマインドを醸成することはオリンピック・パラリンピック教育のみならず、これからの日本の教育にとって極めて重要であるといえます。

3. 筑波大学における「おもてなし学」

東京2020大会で国際的マナーを身につけたスポーツボランティアを養成したい、そういった思いを込めて、筑波大学では「おもてなし学」の授業をしています。学類に関係なくすべての学生が選択できる総合科目Ⅰの授業です。

国際舞台で求められるマナーの基礎知識、相手の文化や習慣を理解した上での臨機黄変な立居振舞などを座学だけではなく実技を交えながら学びます。お互いの心が通い合っただけで初めて「おもてなし」は成り立つ、という観点から、日本のマナー、西洋のマナーの成り立ちと歴史、それぞれに育まれたマナーの文化的背景なども考察します。海外に活躍の場を求める「内から外」のグローバル化と、海外から訪れる外国人に対応する「外から内」のグローバル化の両方に対応できる人材の育成を目指しています。この授業を受けた学生たちが、東京2020大会の運営に携わる8万人のボランティアの中で指導的役割を担ってくれるものと期待しています。

4. 文化プログラムとおもてなしの心の発信

オリンピック・パラリンピックは、世界最大のスポーツの祭典であると同時に、文化の祭典であるともいえます。東京2020大会においても文化プログラムを展開することは、日本



「僕は右手が使えないから左手で握手するね」と笑顔で



「気づき」を大切にし、おもてなしの対応をする6年生



筑波大学「おもてなし学」の授業風景

特別寄稿 ▶

の文化を再認識し、世界に発信していく絶好の機会になります。

わが国の文化というと、まずは長い年月を経て育まれた日本の伝統や「おもてなしの心」「和の精神」といった日本の価値観があげられます。また世界中に多くのファンをもつアニメや漫画、安全・安心で美味しい和の食材や医療品など、世界で高く評価されている現代の文化や技術もあります。さらに「クールジャパン」と呼ばれ、世界中のファッション業界から注目されている日本の若者のファッションも発信すべき文化といえるでしょう。

オリンピック・パラリンピックに向けて、子どもたちがそういった自国の素晴らしい文化を学び、日本人としての自覚と誇りを身に付ける、あるいは次世代の子どもたちへ引き継いでいくことはとても大切なことだといえます。

一方、東京2020大会に向けて、外国人との交流機会が飛躍的に増大することが予想される中、異文化に対する理解を深め、多様性を認め合い、広い視野を持って共に生きていく態度を育成することも、子どもたちにとって極めて重要であるといえます。

そのためには、オリンピック・パラリンピック参加国の文化、歴史、宗教、習慣、しきたり、価値観などについて学ぶこと、そしてそれを通じて相互に共通している点を見つけていく態度や、異なる価値観を尊重し合う態度を育成していくことも必要です。「おもてなし学」の授業のねらいはまさにそこにあります。



Japan day で日本文化を学ぶタジキスタンの人々

5. 一校一国運動とグローバル人材の育成

長野1998大会が発祥である「一校一国運動」も、まさに異文化を尊重しながら他者を思いやるボランティアマインドを醸成する文化プログラムであるといえます。

長野市内の小中学校が、参加する特定の国と地域を担当して、各国の言葉や文化等について深く研究し、入村式に立ち会い、学校に招いたり、競技の応援をしたりすることで国際交流を図りました。市民と参加各国、そしてオリンピック・パラリンピックという大きなイベントを強く結びつけ、大会運営にも市民文化活動にも好影響を与えて、国際オリンピック委員会（IOC）からも高い評価を得ました。それ以来、一校一国運動はIOCのプログラムに取り込まれて、あとに続くオリンピック・パラリンピックに引き継がれていきました。

2014ソチ大会でも一校一国運動が展開されました。オリンピック教育プログラム調査のため、ソチパラリンピックを視察し、「ボランティア教育」を中心に展開したロシア国際オリンピック大学を訪問しました。また「一校一国運動」で日本を担当したソチ第15番学校を訪れたのですが、そこでたいへん恥ずかしい思いをすることになったのです。

ソチ第15番学校は全11学年生徒数1100名の大きな学校です。インターネットや本を頼りに日本の歴史や文化を学んだという同校の掲示板は、様々な日本の写真や研究成果で埋め尽くされていました。小学校低学年では折紙の折り方や手毬の作り



一校一国運動で日本を担当した「ソチ第15番学校」

方を、中学生にあたる学年では松尾芭蕉の俳句をロシア語と日本語で学び、高校生は松下幸之助の経営哲学を取り上げて日本の高度経済成長に関するディスカッションを行っていました。また日本のお弁当はお母さんが愛情込めて作るらしいと、白米を炊いてキャラ弁を作る授業まで行われていました。歓迎セレモニーで番傘を持ち日本舞踊を披露した生徒が、着物姿でお茶を出すその姿には思わず苦笑してしまいました。

校長先生に一校一国運動で日本を担当したことによる成果を聞いたところ、「思いやりを大事にする日本の文化を学んだことによって、わが校の子どもにも寛容性が身に付き喧嘩が減りました」という嬉しい返答がありました。そし

て「私たちは『さくらさくら』の歌を覚えました。でもせっかく日本の方がいらしたので、流暢な日本語で歌っていただけませんか」と依頼されたのです。「さくら～さくら～やよいのそらは～」と歌い始めたのですが、そのあとの歌詞が出てきません。私たち 10 名で行ったのですが、誰一人フルコーラス歌える者は居らず、「Sorry.」と謝罪するだけ。たいへん恥ずかしい思いをして帰ってきました。

そのように考えると、日本の文化を知らない、きちんと外国人に説明することができない日本人は本当に多いように思います。2013 年 12 月にユネスコ無形文化遺産に登録された和食についても、その知識や食べ方、箸使いやタブーを外国人に説明できる日本人がいったいどのくらいいるのでしょうか。能、狂言、雅楽、文楽といった日本の伝統芸能を外国人に伝えられる人がどのくらいいるのでしょうか。

グローバル人材の育成とは外国語を習得することだけではありません。母国日本の文化を知り、それを外国の方々に正しく伝えることができるということもとても大切だと思います。

「おもてなし」は互いの心が通い合って初めて成り立ちます。尽くし上手であり尽くされることも上手な国際人としてのたしなみを、子供たちの心に響く言葉で伝えていきたい。そういう願いを込めてこれからも「おもてなし学」の構築に励んでいきたいと思っています。

参考文献

江上いずみ著「JAL 接客の達人が教える幸せマナーとおもてなしの基本」海竜社 2015 年

日本マナープロトコル協会「さすが！といわせる大人のマナー講座」PHP 研究所 2013 年

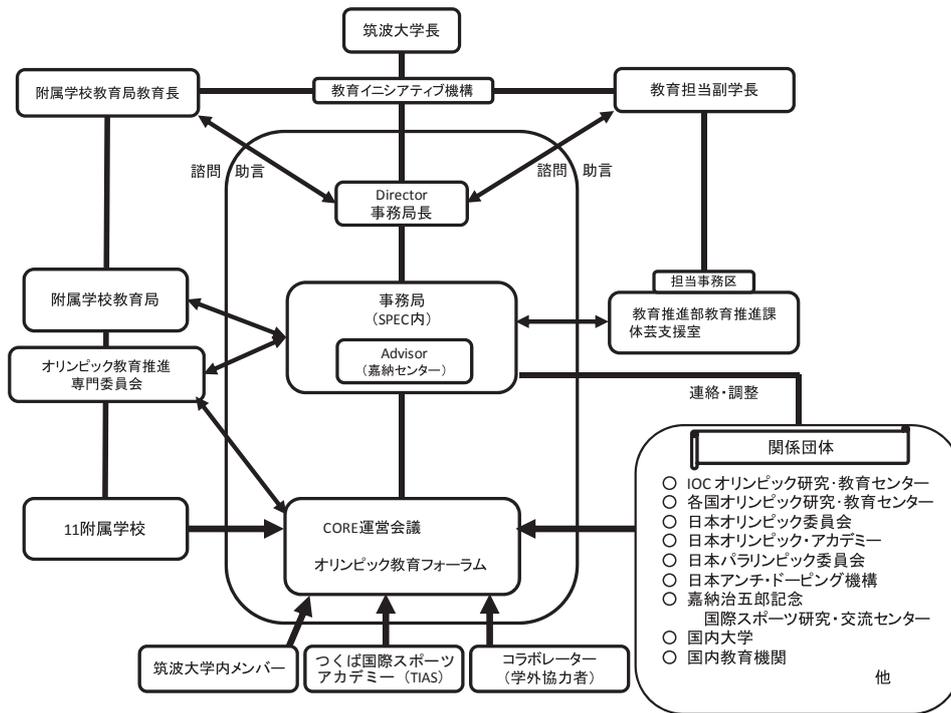


日本の伝統や「和の心」を学ぶ留学生たち

筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（平成 27 年度）

委員長	石隈 利紀	附属学校教育局教育長
副委員長	今井 二郎	教育長特命補佐
副委員長	小林美智子	教育長特命補佐
	真田 久	体育専門学群長、体育系教授
	江口 勇治	附属学校教育局教授
	松本 未男	附属学校教育局教授
	宮崎 明世	体育系准教授
	吉沢 祥子	特別支援教育研究センター教諭
	清水 由	附属小学校教諭
	國川 聖子	附属中学校教諭
	奥村 準子	附属高等学校教諭
	登坂 太樹	附属駒場中・高等学校教諭
	藤原 亮治	附属坂戸高等学校教諭
	寺西 真人	附属視覚特別支援学校教諭
	渡邊 明志	附属聴覚特別支援学校教諭
	石飛 了一	附属大塚特別支援学校教諭
	宮内 綾香	附属桐が丘特別支援学校教諭
	河場 哲史	附属久里浜特別支援学校教諭

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図



平成 28 年度 CORE 運営体制

代表 永田恭介 (学長)
副代表 宮本信也 (副学長・附属学校教育局教育長)

(運営委員会)

委員長 真田 久 (体育系 教授・体育専門学群長)
構成員 松本末男 (附属学校教育局 教授)
宮本俊和 (理療科教員養成施設長)
清水 論 (体育系 教授)
宮崎明世 (体育系 准教授)
成瀬和弥 (体育系 助教)
中塚義実 (附属高等学校 教諭)

(アドバイザー)

江上いづみ (筑波大学客員教授)
桶谷敏之 (日本スポーツ振興センター)
大橋民恵 (嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター)

(事務局)

事務局長 真田 久 (体育系 教授・体育専門学群長)
構成員 宮崎明世 (体育系 准教授)
成瀬和弥 (体育系 助教)
荒牧亜衣 (体育系 特任助教)
大林太朗 (大学院博士後期課程)
杉並伸勉 (大学院博士前期課程)
福田佳太 (大学院博士前期課程)

(附属学校オリンピック教育推進専門委員会)

委員長 宮本信也 (副学長・附属学校教育局教育長)
副委員長 今井二郎 (教育長特命補佐)
副委員長 小林美智子 (教育長特命補佐)
構成員 江口 勇治 (教育局 教授)
松本 末男 (教育局 教授)
吉沢 祥子 (特別支援教育研究センター 教諭)
附属学校群 担当教員